千里ニュータウン

人と生活

1973. 6

財団法人　大阪府千里センター

はじめに……

千里ニュータウンは、着工いらい14年目をむかえて、おおむね完成されたまちの姿をととのえてまいりました。

ひろびろとした公園と緑地、歩道と車道が分離された道路、整備の行きとどいた学校と各種の買物施設、通勤通学に便利な交通機関、静かで日当りのよい住宅地などによって、日本ではかつてみられなかった水準の高い人工のまちとなりました。

千里ニュータウンは、その後全国各地でつくられた大小幾多のニュータウンのパイオニアとなり、ここで実施されたいろいろな試みは、ニュータウン開発にとって、重要な参考例とされてきました。

千里ニュータウンは、約3千億円をかけた「巨大な都市づくり」の場であり、千里に学び、これを生かしていくことが、これからのまちづくりに、きわめて大切なことと思われます。

ニュータウンの計画は、単に施設の計画や建設をするだけではなく、そこで、どのような人びとが、どのように暮らしているかを明らかにして、今後の計画や管理に生かしていくことが必要であります。

本冊子は、千里ニュータウンに関する多くの調査研究を参考にしながら、千里に住む「人と生活」に、焦点をあわせてまとめたもので、いわば、内側からながめた千里ニュータウンの生活実態の記録であります。

千里ニュータウンを、より豊かで住みよいまちに育てていくために、お役に立てば幸いと存じます。

昭和48年6月15日

財団法人　大阪府千里センター

常務理事兼事務局長　　浜　屋　正　則

もくじ

第1章　千里ニュータウンのあらまし

1．千里ニュータウン ── 住宅難の緩和のために　3
2．交通 ── 都心へは30分　4
3．住宅地のまとまり ── 小学校区を単位としたまちづくり　5
4．施設 ── 生活範囲に応じて　5
5．住宅 ── バラエティに富んだ住宅　6
6．土地の利用 ── 24パーセントが公園　7
7．道 ── 人と車の分離　7
8．これからの千里 ── 北大阪の副都心　8

第2章　千里ニュータウンの人びと

1．人口 ── 計画人口にほぼ達している　11
2．人口の増減 ── 社会増から自然増へ　12
3．定住性 ── 賃貸住宅層はすみかえを希望　13
4．前住地 ── 大阪市、大阪府下から　13
5．年令 ── 男32才女27才前後の層が厚い　15
6．職業 ── 8割が事務職と技術職　15
7．家族 ── 若夫婦と子ども2人　16

第3章　千里ニュータウンの生活

●通勤・通学

1．外出 ── 通勤・通学・買物がおもな目的　19
2．交通手段 ── 徒歩とバス　20
3．ラッシュアワー ── 朝のピークは7時50分　21
4．自動車 ── ふえるマイカー利用　22
5．通勤 ── 7割が大阪市へ　23
6．通学 ── ニュータウン内の学校へ　24

●買物

1．家計 ── 収入も多いが支出も多い　25
2．買物施設 ── 3段階に構成されている　26
3．買物場所 ── 結局近いところへ　27
4．利用目的 ── 楽しみも多いショッピング　28
5．買物品目 ── 食料品は近くで、衣類は千里外で　29
6．買物回数 ── 近くへ何度もかよっている　30

●教育と文化活動

1．学校 ── 児童、生徒がふえて過密　31
2．幼稚園 ── 3割が他住区へ　31
3．サークル・クラブ活動 ── 集会所を活用　32
4．宗教 ── 信仰への関心は薄い　32
5．図書館 ── 巡回図書だけにたよっている　32

●住民サービス

1．医療 ── 内科は近くで、産婦人科は外へ　33
2．福祉 ── 保育所と老人ホーム　34
3．交通サービス ── 施設の半数が駐車場　34
4．公共サービス ── よくととのっている　35
5．民間、個人サービス ── 大工さんがいないまち　35

● レクリエーション
1．楽しみ ―― 四季の行事と娯楽 36
2．室内娯楽 ― 民間レジャーセンターが唯一のもの 36
3．公園 ―― 身近な自然 37
4．スポーツ ―― 休日は大盛況 38

● 自治活動
1．住民組織 ―― 新らしい人間関係が育っている 39
2．自治会 ―― かたい結束で活ばつな行動 39

● 家庭生活
1．A家の場合 ―― 41
2．B家の場合 ―― 47

第4章　千里ニュータウンが教えるもの

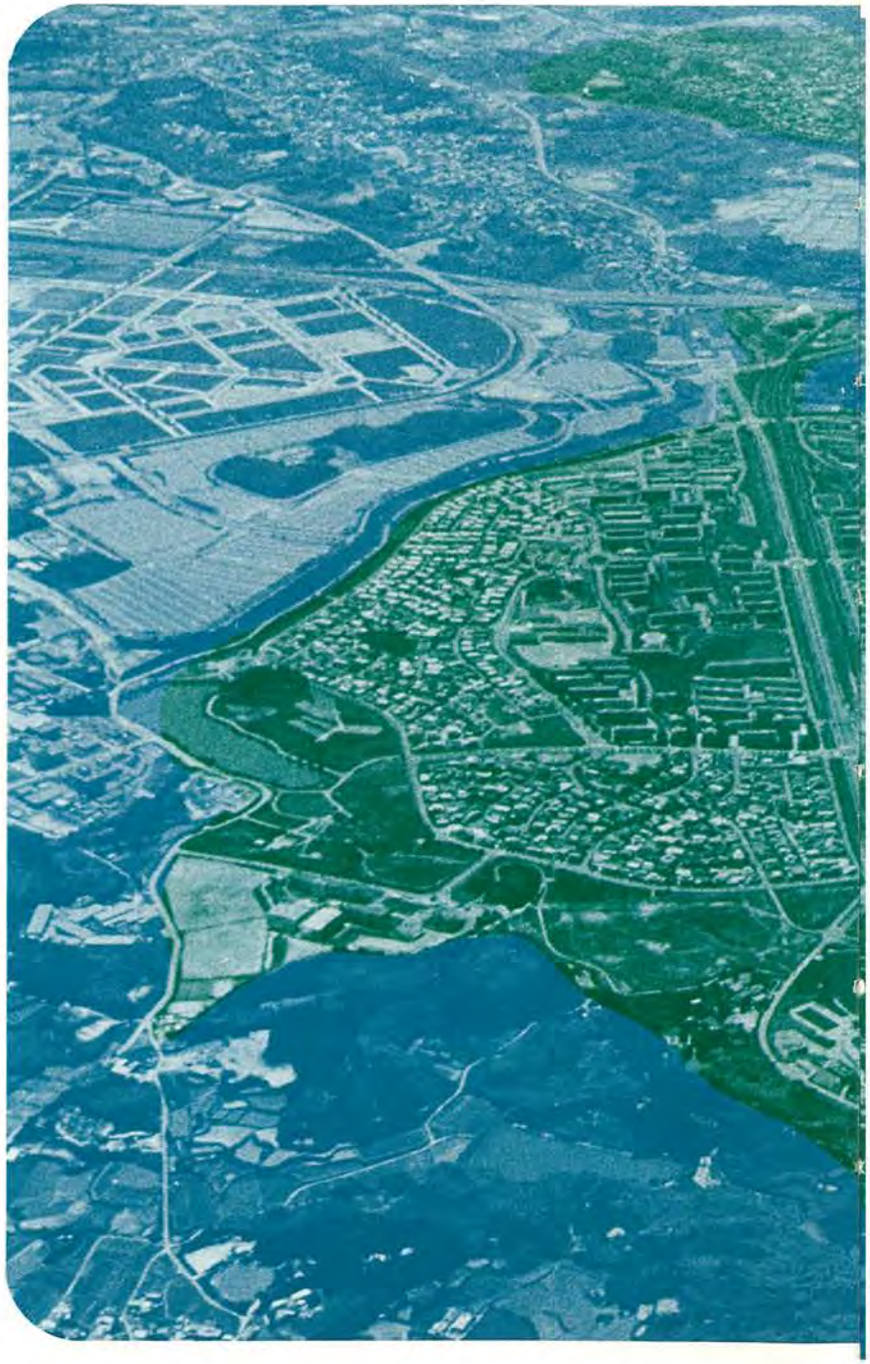
● ニュータウン住民の千里評価
1．環境評価 ―― 7割が住みやすいと思っている 53
2．要望 ―― 図書館と医療施設 54

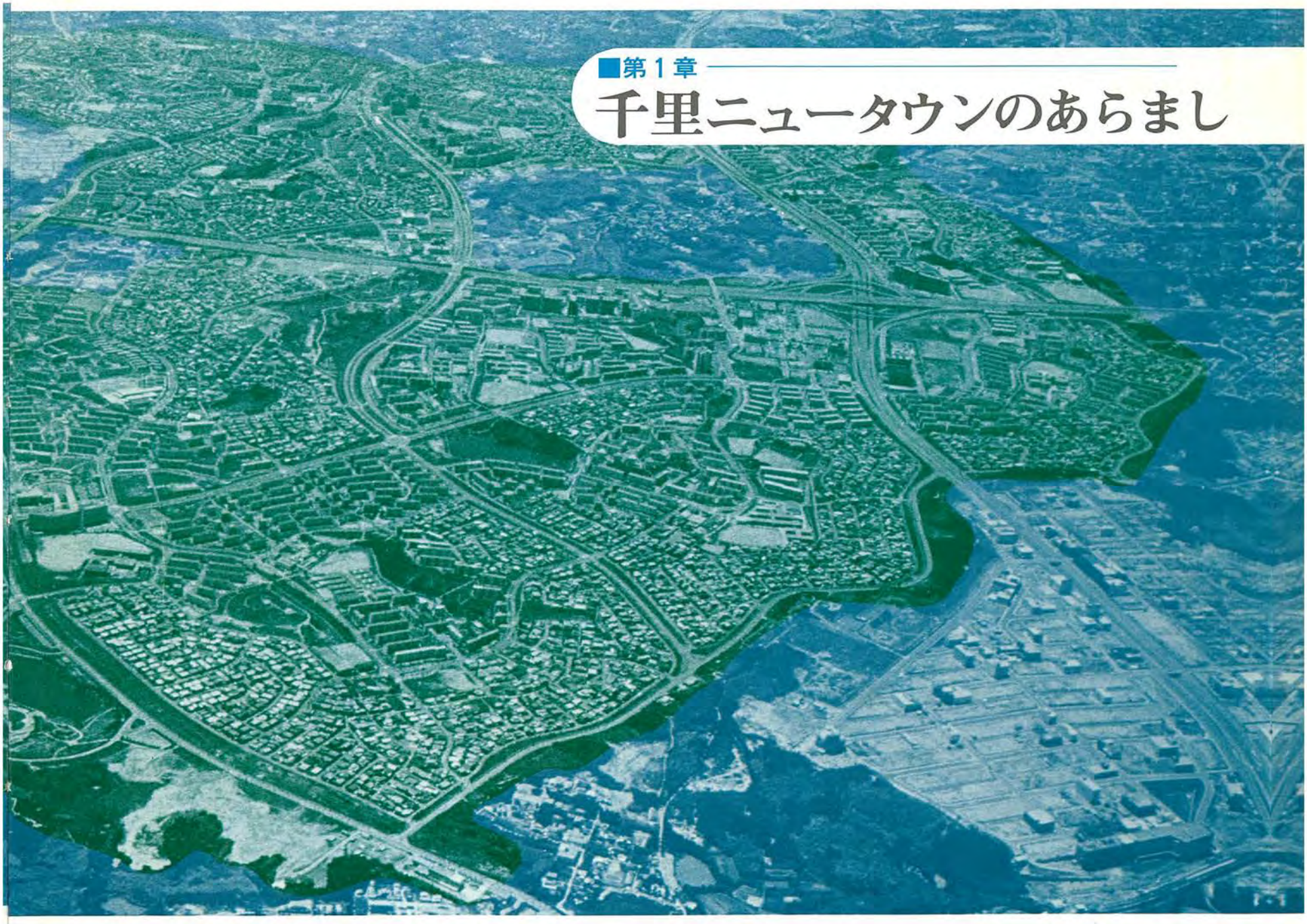
● 千里の反省
1．多様性 ―― バランスのとれたまちへ 55
2．施設の配置計画 ―― 近隣センターを生かす 55



千里ニュータウン・マスタープラン







■第1章

千里ニュータウンのあらまし

1．千里ニュータウン（住宅難の緩和のために）

昭和30年代にはじまった、急激な経済成長とともに、人口の都市集中がはげしくなり、住宅事情は一段と深刻になった。

それに加えて、大阪府下の１世帯当りの人数は、昭和30年の4.51人から、昭和45年には3.47人と減って、世帯の細分化がすすみ、住宅難をいっそう増大させる結果になった。

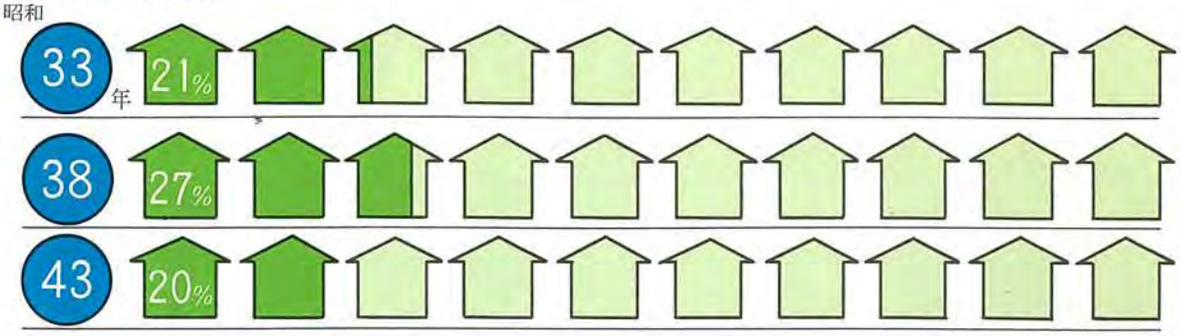
昭和33年ごろ、府下には総世帯の約21パーセントに当る23万戸もの住宅難世帯があった。そのうえ、年間約20万人の人口増加があり、住宅の需要はさらに大きくなっていった。

このような住宅難対策のひとつとして、安くて良質の住宅と宅地を大量に供給するために、千里ニュータウンの建設が計画された。

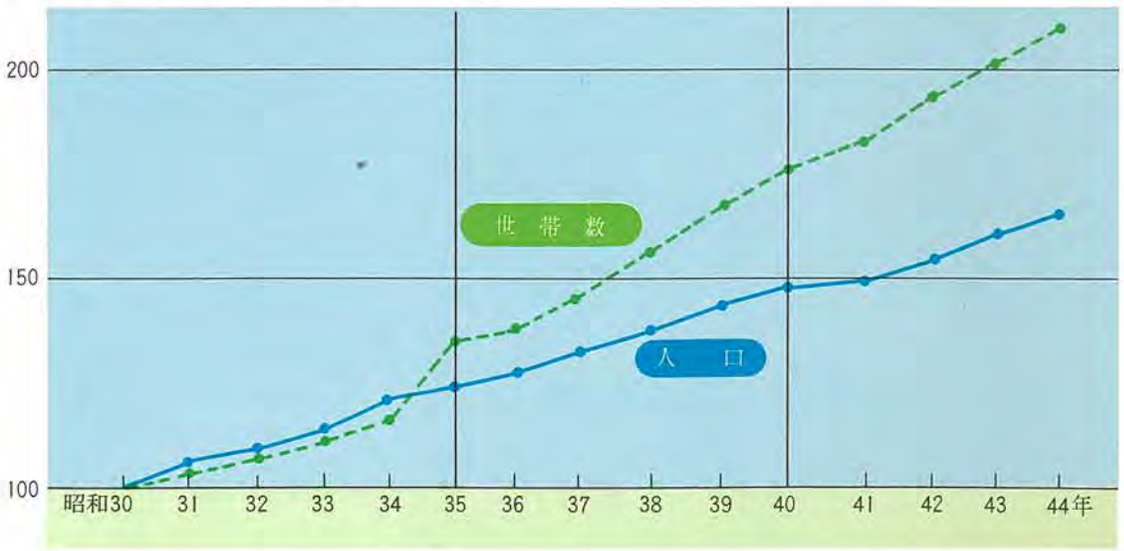
当時、大阪府の北部に、約４,000ヘクタールの千里丘陵一帯が、ほとんど未開発で残されていた。

昭和35年、吹田市と豊中市にまたがる面積、約1,200ヘクタール、人口約15万人、住宅戸数３万7,000戸の大規模な住宅都市「千里ニュータウン」の建設がはじめられたのである。

住宅難世帯の割合



大阪府人口・世帯数の指数推移（昭和30年＝100）





スプロール市街地



ニュータウン



地下鉄堺筋線〔天神橋筋六丁目より阪急電車と相互乗入〕

天神橋筋六丁目 —7分→ 淡路 —7分→ 吹田 —6分→ 千里山 —3分→ 南千里 —5分→ 北千里

地下鉄御堂筋線〔江坂より北大阪急行となる乗換えなし〕

梅田 —6分→ 新大阪 —5分→ 江坂 —5分→ 桃山台 —3分→ 千里中央

2. 交通 （都心へは30分）

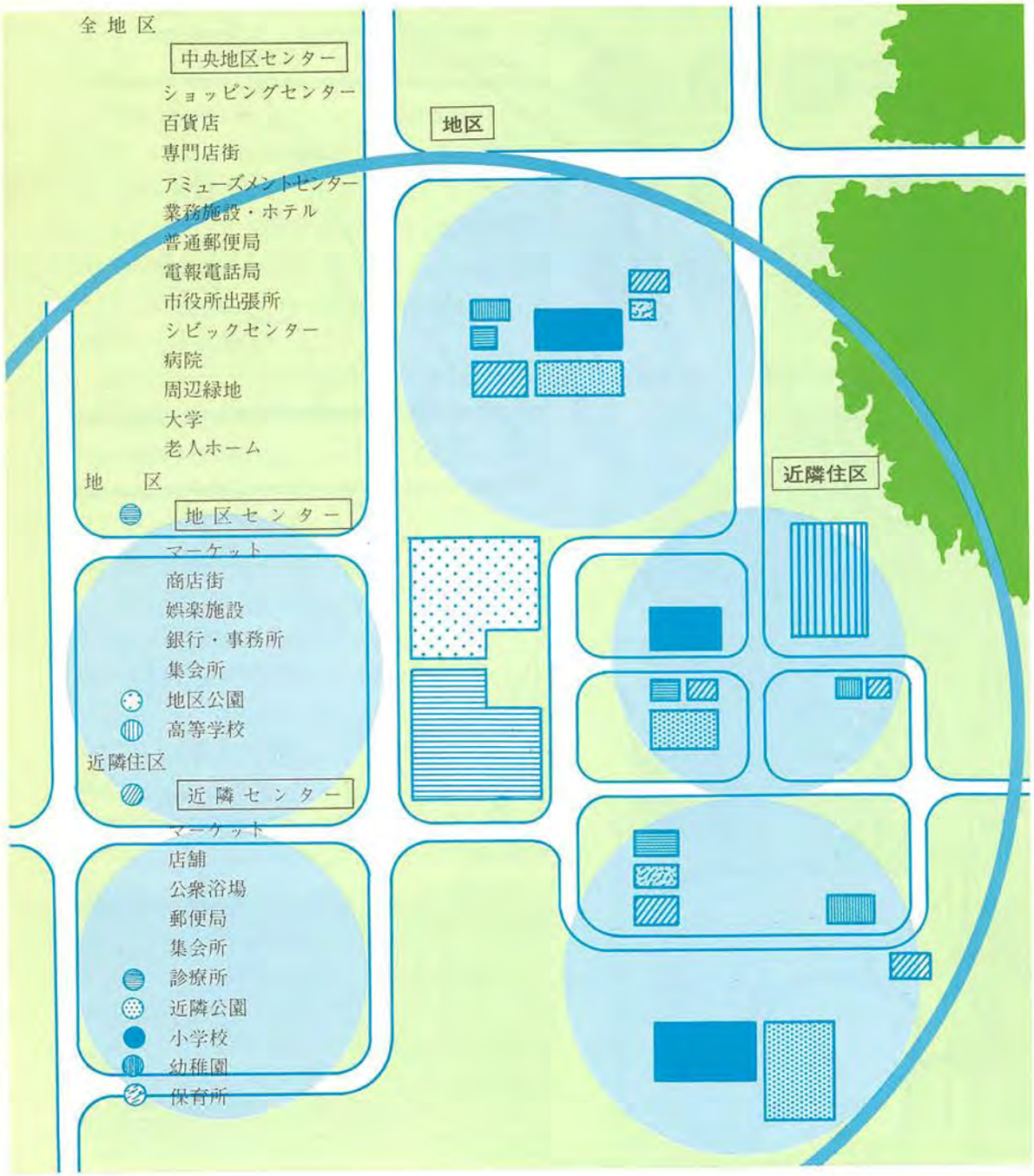
千里ニュータウンは、大阪の都心からわずか15kmしか離れていない。それに、淀川両岸と阪神間の工場地帯にも近いところから、イギリスのニュータウンのように、職場と住まいが近接した型のニュータウンではなく、住宅専用の都市として計画された。

この住宅都市から外へ、毎日約6万の人びとが、通勤通学のために移動する。それらの人びとを能率よく大量に運ぶために、都心と直結した2本の鉄道が敷かれた。

昭和38年に、阪急千里山線が延長され、7年後、万国博を機に北大阪急行が開通した。

このほか、大阪府の広域幹線道路である中央環状線がニュータウンを横切り、さらに、新御堂筋線が縦にはしって、周辺道路も一段ととととのった。

千里ニュータウンは、都心や国際空港へも30分で行ける、北大阪の交通の要所となったのである。



3. 住宅地のまとまり（小学校を単位としたまちづくり）

普通、都市は、ながい歴史の経過のなかで、自然とその魅力と秩序をつちかっていくものである。

千里ニュータウンのように、大規模な住宅都市を人工的に、しかも短期間につくりあげる場合は、まちづくりに骨子となる考え方が必要となる。

千里ニュータウンでは、アメリカやイギリスで試みられた「近隣住区」の理論を、日本の風土に適用して計画がすすめられた。

つまり、人口１万の小学校区を、まちづくりの最小単位として、そこに、人びとの日常生活に必要な施設である学校・幼稚園・保育所・公園・診療所・近隣センター（店舗・マーケット・警官派出所・郵便局・集会所）などがつくられた。このひとかたまりの地域を近隣住区と呼ぶ。

自治会、各種サークル、住民運動などの人びとのコミュニティ活動が、ほとんど小学校区を中心に行われていることをみても、この近隣住区は、まちづくりの基本的な単位であるといえよう。

4. 施設　（生活範囲に応じて）

千里ニュータウンでは、日常生活に必要な実用本位の施設から、都市としての魅力をそなえた施設まで、人びとの生活範囲に応じて、数多くの施設が配置されている。人びとの生活範囲の広がりを〈近隣住区〉→〈地区〉→〈ニュータウン全域〉の３段階に考えて、利用者の年令、目的、生活時間に合わせた、さまざまな種類の施設がつくられている。

5. 住宅 （バラエティに富んだ住宅）

ニュータウンが、まちとして豊かに発展していくには、年令・職業・収入など、いろいろな人びとが生活するのがのぞましい。

そのために、世帯の若い小家族向きには、公営、公社、公団などの賃貸アパートを、比較的大家族で収入も多い中高年向きには、分譲アパート、一戸建住宅が建設された。

また、住宅の型式も、共同住宅（中層・高層）連続（長屋式）住宅、独立住宅など、さまざまな種類をとり入れた。

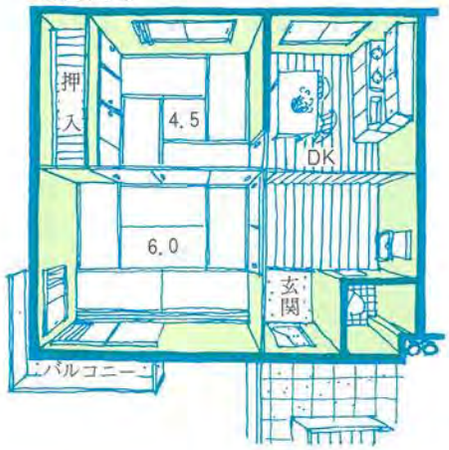
千里の住宅の大部分は、賃貸住宅で、全戸数、3万 7,000戸のうちの4分の3を占めている。

住宅一戸当りの床面積は、公営・公社・公団とも大差はなく２ＤＫタイプの50㎡ 前後が多い。

２ＤＫタイプを標準とした賃貸アパートの家賃を、住宅の種類ごとに比較すると、公営住宅がもっとも安く、公団の約２分の１となっている。

公営住宅の建設には公共の補助金がついているのに対し、公団住宅は政府や民間の借入金で建てられるため、このような家賃の差が出てくるのである。

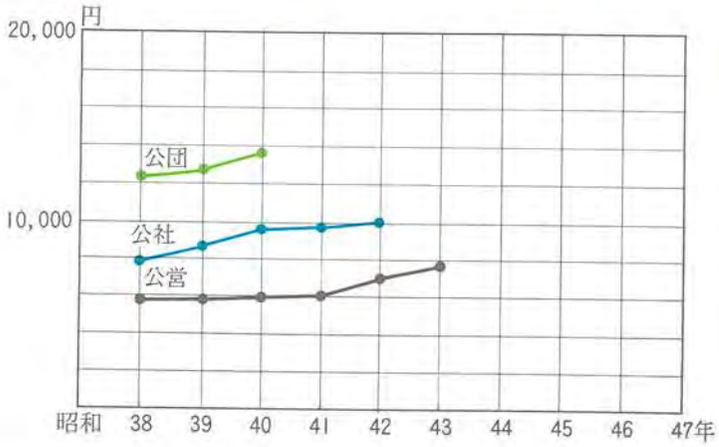
公営住宅



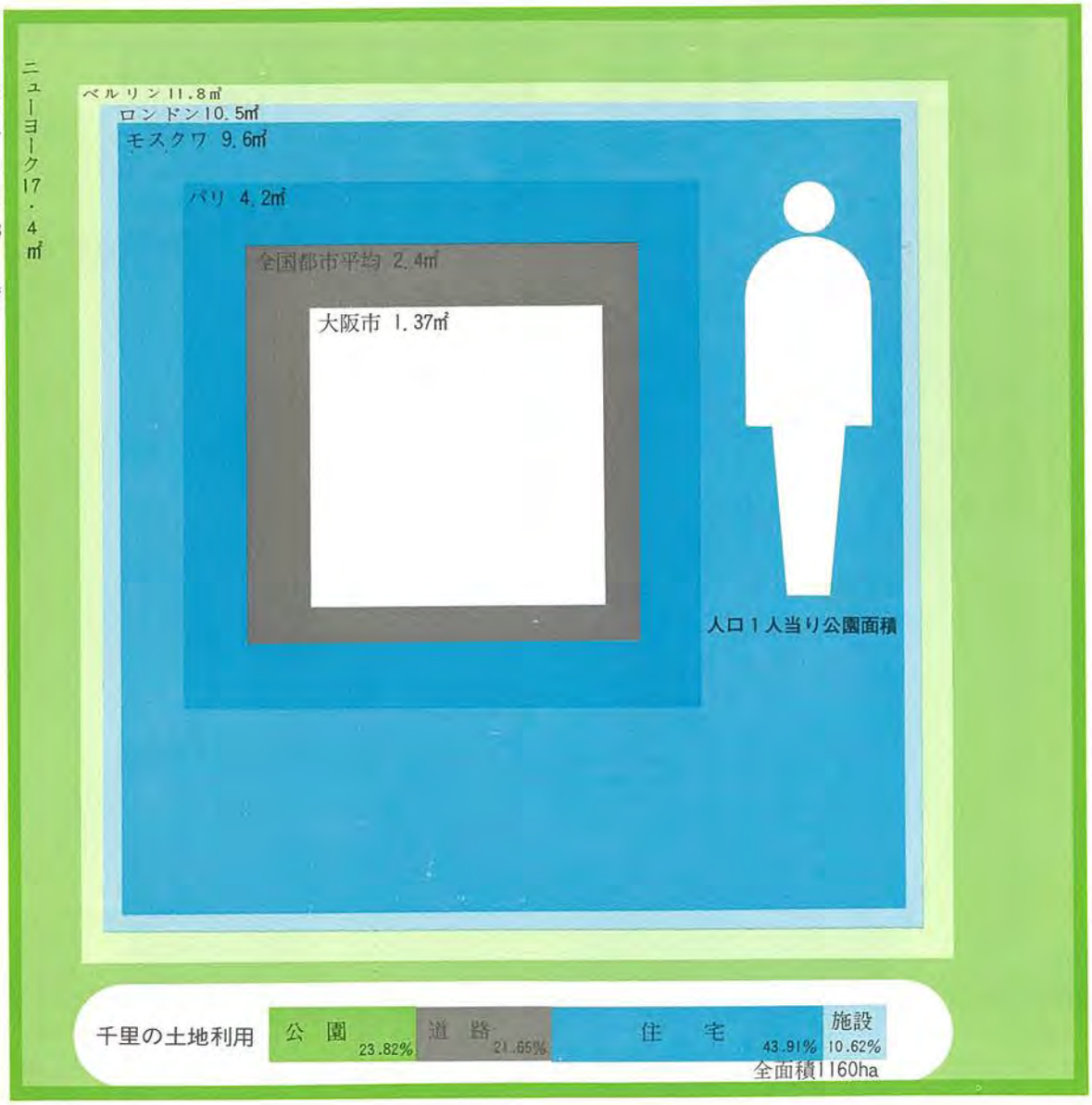
公団住宅



家賃の推移
２DKタイプ



	津雲台	高野台	佐竹台	桃山台	竹見台	青山台	藤白台	古江台	吹田市計	新千里北町	新千里東町	新千里西町	新千里南町	豊中市計	合計
公営		1,619	795	1,250	390	500	1,128	1,482	7,164	1,312	796		1,060	3,168	10,332
公社	646		855			200	853		2,544	112	1,160	625	286	2,223	4,767
公団	1,100	218		608	2,573	1,846			6,345	1,172	1,585	534		3,291	9,636
社宅	1,099		491	350	730	121	559	1,264	4,614	24	268	460	1,000	1,752	6,366
一戸建分譲アパート	541	524	324	400	132	817	663	945	4,346	618	32	433	800	1,883	6,229
計	3,386	2,361	2,465	2,608	3,825	3,484	3,203	3,691	25,013	3,238	3,841	2,052	3,146	12,317	37,330



6. 土地の利用 （24パーセントが公園緑地）

千里ニュータウンの土地の使い方は、住宅用地がわずか44パーセントで、公園や道路の面積が46パーセントも占めている。

ニュータウンの敷地全体の4分の1しか建物が建っていないので、日照、通風、プライバシーなどにめぐまれ、一般の市街地にくらべて、はるかに環境のよいまちだといえよう。

ニュータウンの周辺には、延長13kmにわたって、幅15m～300mの緑地がとりまき、これが周辺の市街地との区切りとなっている。このほか、大小の公園が利用しやすい位置に計画されている。

7. 道 （人と車の分離）

千里は歩行者の交通事故が非常に少ないまちである。人と車という、この相入れぬものが、入りまざらないよう、おもな道路では歩道と車道がはっきりと分けられている。

住宅地内へ、用のない車が入ってこないように、住区の外側に幹線道路をもうけて、通過するだけの車をさばき、末端の細い道路には、行きどまりの袋小路（クルドサック）をたくさんつくっている。こうして、安全で静かな環境が保たれているのである。ニュータウン建設の後半期には、歩道と車道の分離を徹底させ、「緑道」と名付けた、車にわずらわされずに緑のなかを歩ける歩行者専用道路が一部につくられた。千里に続いて開発された泉北ニュータウンでは、この緑道を縦横にめぐらす計画がされている。

8. これからの千里（北大阪の副都心）

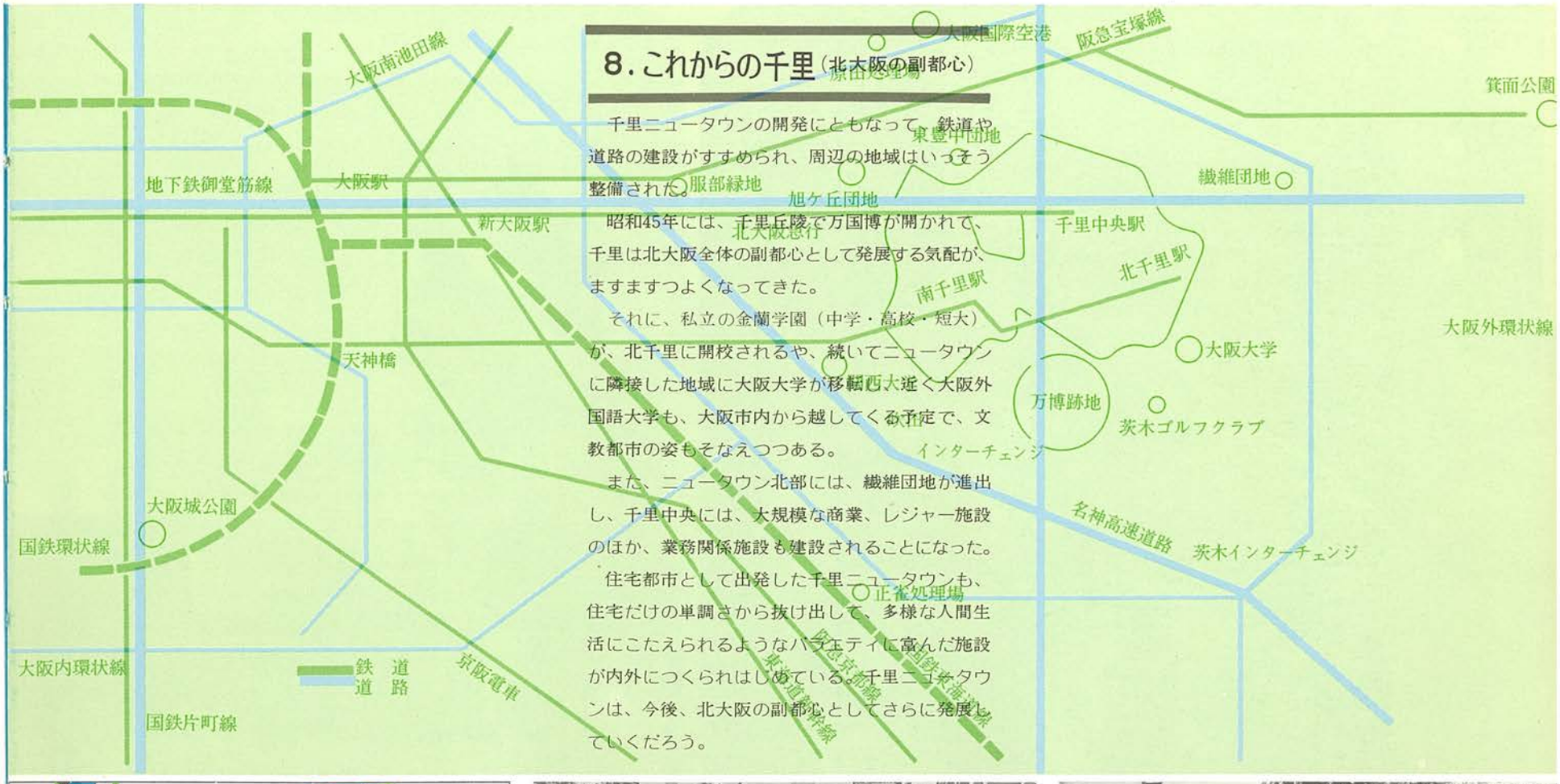
千里ニュータウンの開発にともなって、鉄道や道路の建設がすすめられ、周辺の地域はいっそう整備された。

昭和45年には、千里丘陵で万国博が開かれて、千里は北大阪全体の副都心として発展する気配が、ますますつよくなってきた。

それに、私立の金蘭学園（中学・高校・短大）が、北千里に開校されるや、続いてニュータウンに隣接した地域に大阪大学が移転し、近く大阪外国語大学も、大阪市内から越してくる予定で、文教都市の姿もそなえつつある。

また、ニュータウン北部には、繊維団地が進出し、千里中央には、大規模な商業、レジャー施設のほか、業務関係施設も建設されることになった。

住宅都市として出発した千里ニュータウンも、住宅だけの単調さから抜け出して、多様な人間生活にこたえられるようなバラエティに富んだ施設が内外につくられはじめている。千里ニュータウンは、今後、北大阪の副都心としてさらに発展していくだろう。

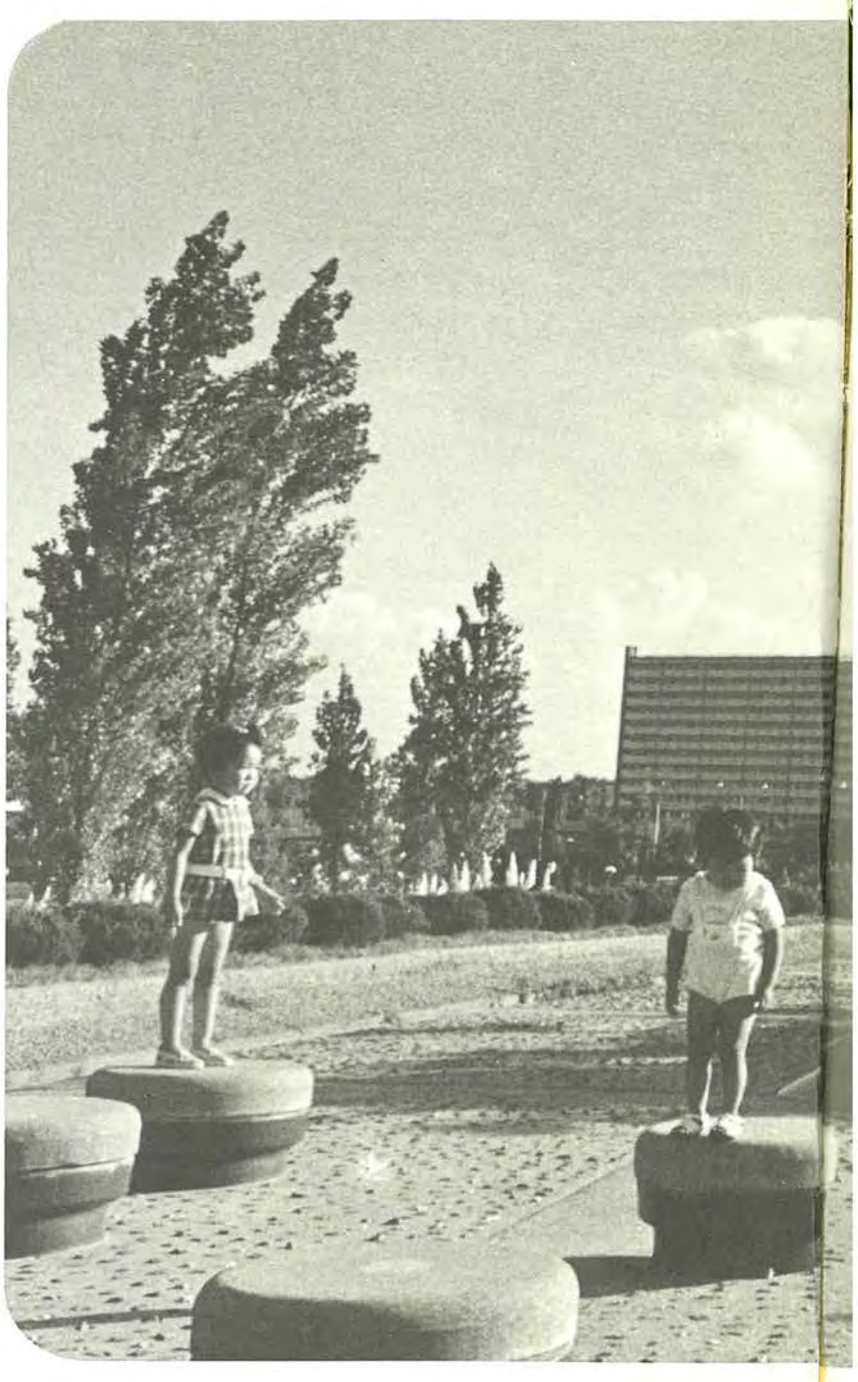



歩車分離モデル図











■第2章

千里ニュータウンの人びと

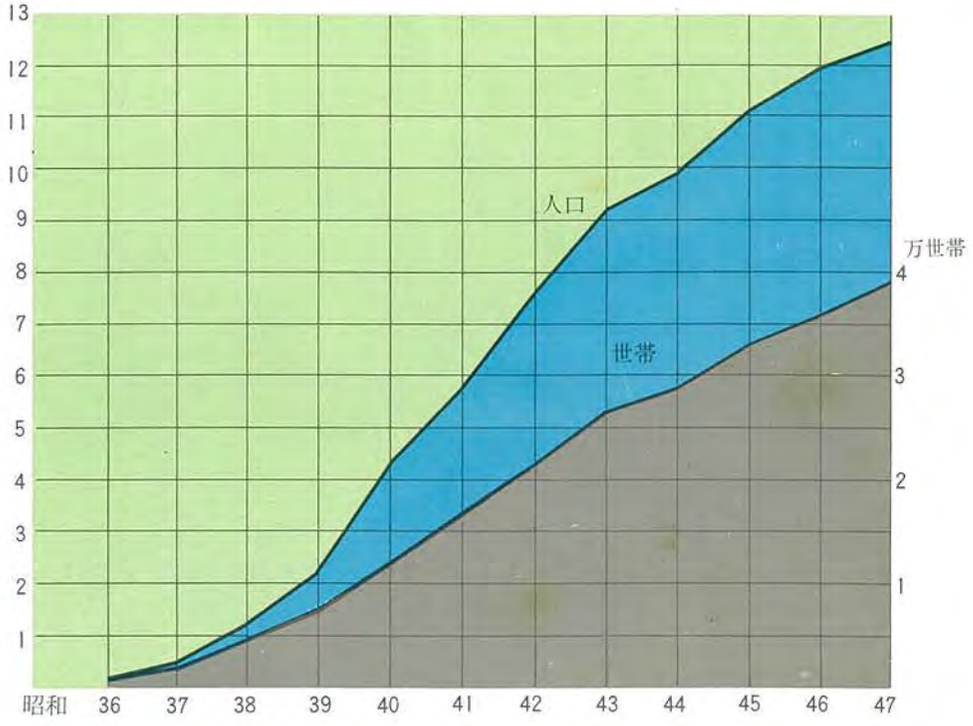
1．人口（計画人口にほぼ達している）

千里ニュータウンは、人口15万、世帯数3万7,000のまちとして計画された。

昭和48年４月現在、人口は12万５,000、世帯数３万８,000となり、世帯数は、すでに最初の計画を上まわっている。

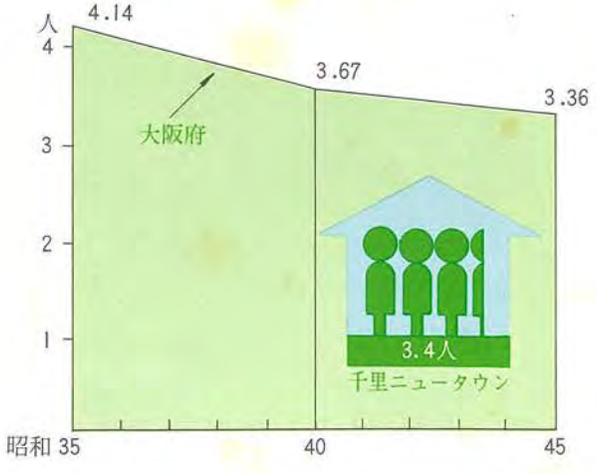
昭和36年から入居がはじまり、ニュータウンの人口と世帯数は、住宅の建設にそって着実に伸びてきた。そして、11年目でほぼ計画どおりの数値に達し、住宅建設が終りに近ずいたここ2･3年はその伸びもにぶってきている。

千里ニュータウンの人口推移





１世帯あたり家族人員



2．人口の増減（社会増から自然増へ）

住宅の建設がすすみ、ほぼ最初の計画どおりの、人口、世帯数に近ずいてきて、その増加の伸びがにぶってくると、人口増加の中身は、社会増（外からの転入）から自然増（出生）にうつりかわっている。

自然増は、最近、 年間約3,000人近い増加をみせており、今後もこの傾向はつづきそうである。

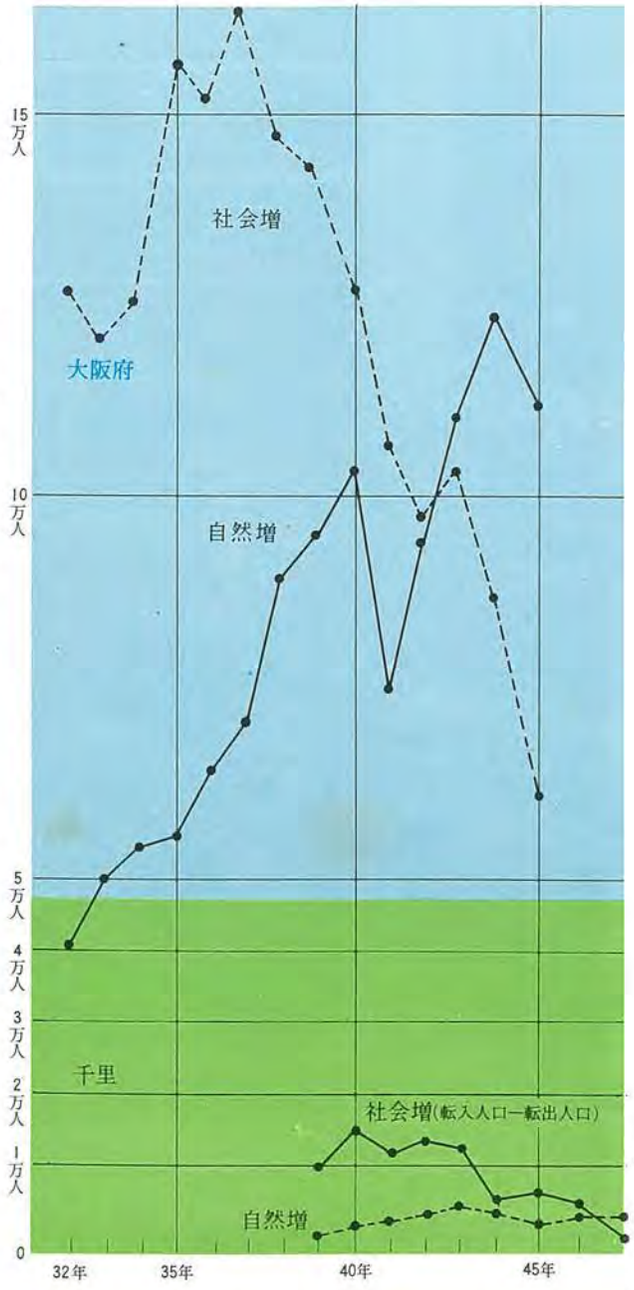
社会増は、だんだんと年を経るごとに、転入人口が少なくなり、反対に転出がふえ、昭和47年には、転入、転出とも、ほぼ 1,300人と同数になってきている。

大阪府下の世帯当りの人数は、減少しつづけているのに、千里では、最初から 3.3人～ 3.4人とつねに変化がなく、千里の人口増加は、世帯数増加によるものが多い。

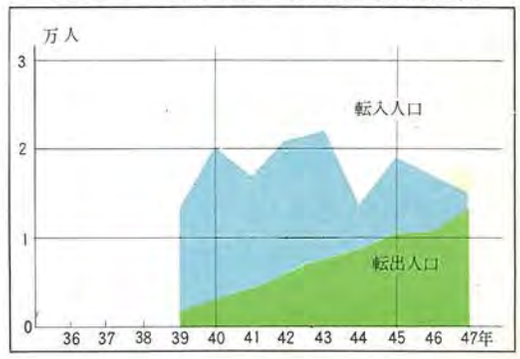
これは、全戸数の4分の3を占める賃貸住宅の、1戸当りの住宅の広さに起因しているようである。つまり、1戸に3.4人以上は住みにくい広さの住宅が多いということであろう。

千里ニュータウンの全容がととのえられてきた昨今、大きな社会増はみられなくなってきているが、転入、転出のはげしい仮住まいのまちとなるか、家族人員の変化に対応できる、定住しやすいまちとなり、豊かなコミュニティを育てることができるか、今後に問われるところである。

社会増と自然増の推移



千里ニュータウン転入・転出人口年次変化



3. 定住性 （賃貸住宅層はすみかえを希望）

年間、ニュータウン全人口の約10パーセントの人びとが入れかわっているが、そのはっきりした理由はわからない。

公営、公社、公団など、賃貸住宅層に住みかえ指向が高く、したがって居住年数も短かい。

一方、分譲アパートや一戸建住宅の持家層は、定住への指向が高く、当然居住年数も長くなっている。

4. 前住地 （大阪市、大阪府下から）

千里ニュータウンの人びとの、64パーセントは大阪府下と大阪市内から移り住んできた人たちである。

次いで、兵庫県下の市部からが多く、祖父の代には近畿地方以外に住んでいた人びとが半数ある。

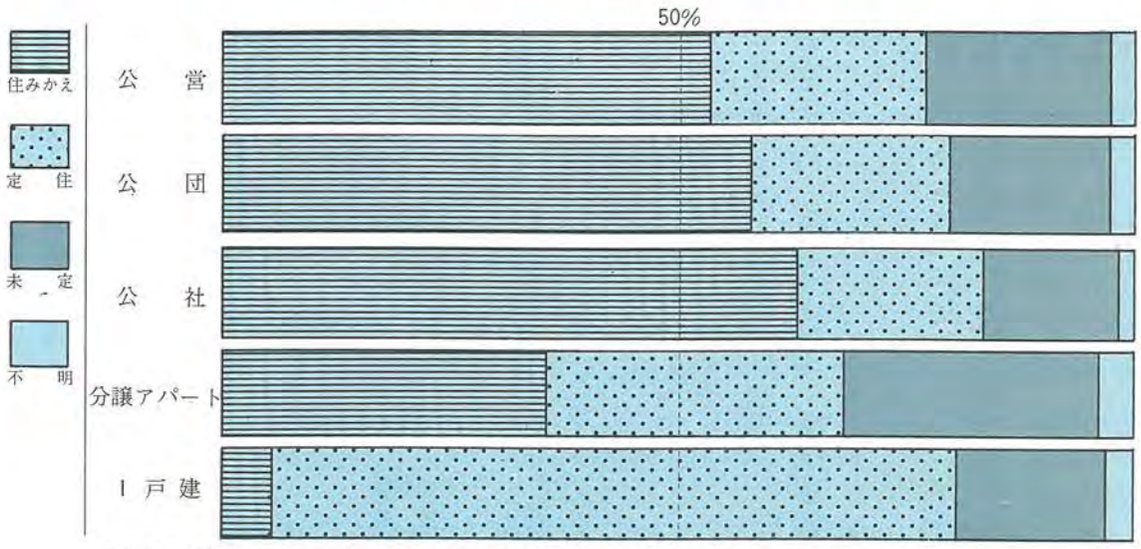
公営、公社住宅の人びとの大多数が、大阪市または大阪府下から来ているのは、入居条件で、前住地か職場が、大阪市、大阪府にあるものにかぎられているからである。

人びとが、ニュータウンに移り住む前に住んでいた住宅は、民営借家がもっとも多い。

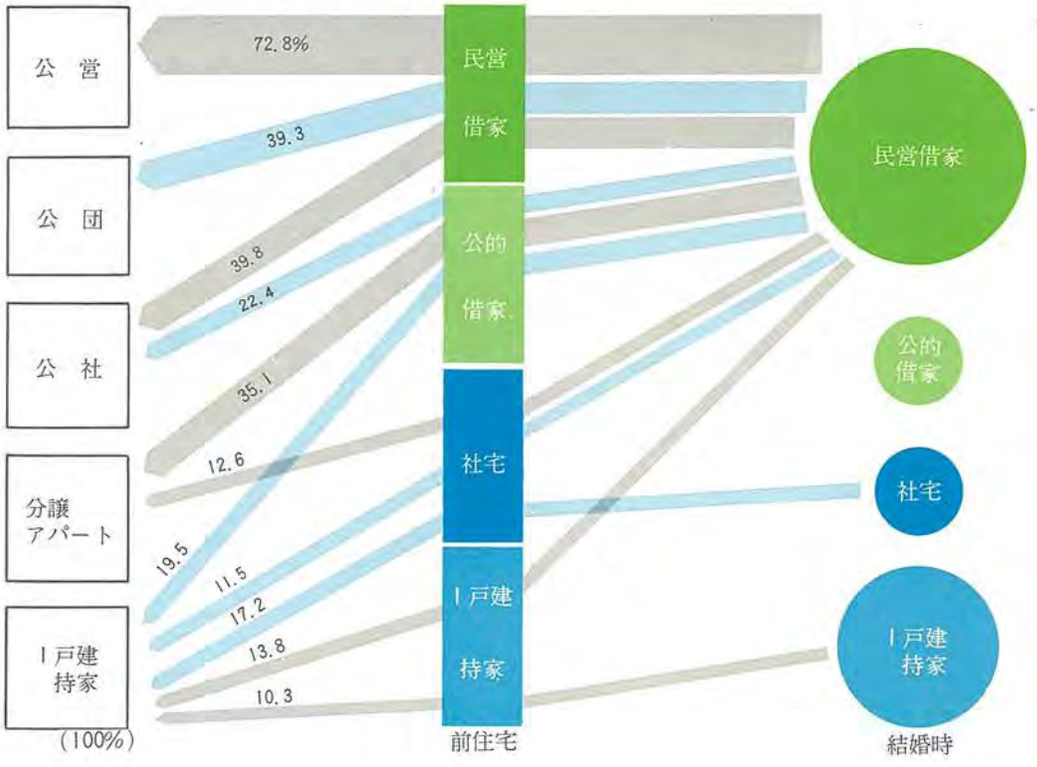
公営、公社、公団住宅層の約半数は、民営借家から移転してきている。

分譲アパート層は約半数が公社や公団などのアパート暮らしの経験者である。

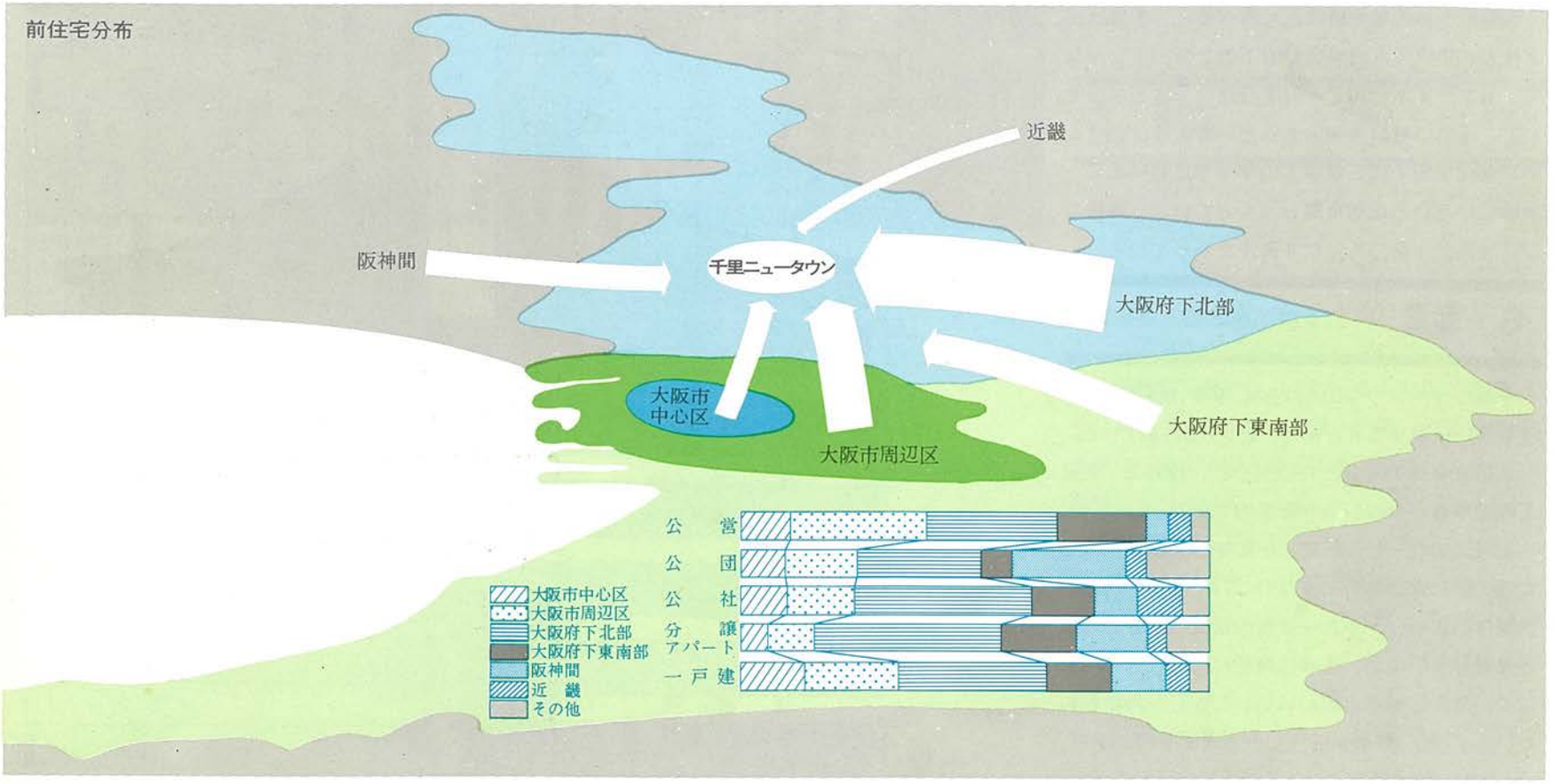
一戸建住宅層は、持家から移り住んだものが、48パーセントもあるが、公社、公団などの公的借家や社宅からの住みかえも多い。



居住歴（構成比10%以上のみ）




安田運送


前住宅分布
近畿
阪神間
千里ニュータウン
大阪府下北部
大阪市
中心区
大阪府下東南部
大阪市周辺区
公営
公団
公社
分譲
アパート
一戸建
大阪市中心区
大阪市周辺区
大阪府下北部
大阪府下東南部
阪神間
近畿
その他

5. 年令(男32才・女27才前後の層が厚い)

千里ニュータウンには、他の団地と同じように、30才代の夫と、20才代の妻、そして子どもは5才未満の幼児が圧倒的に多い。男は30才～34才、女は25才～29才の人がもっとも多く、全体に25才～40才、0才～9才の層が厚い。それに反して、10才～20才前後のヤング層、45才以上の高年令層がきわめて薄い。こうした傾向は、今後、転入転出がひんぱんに行われるかぎりつづくと思われる。

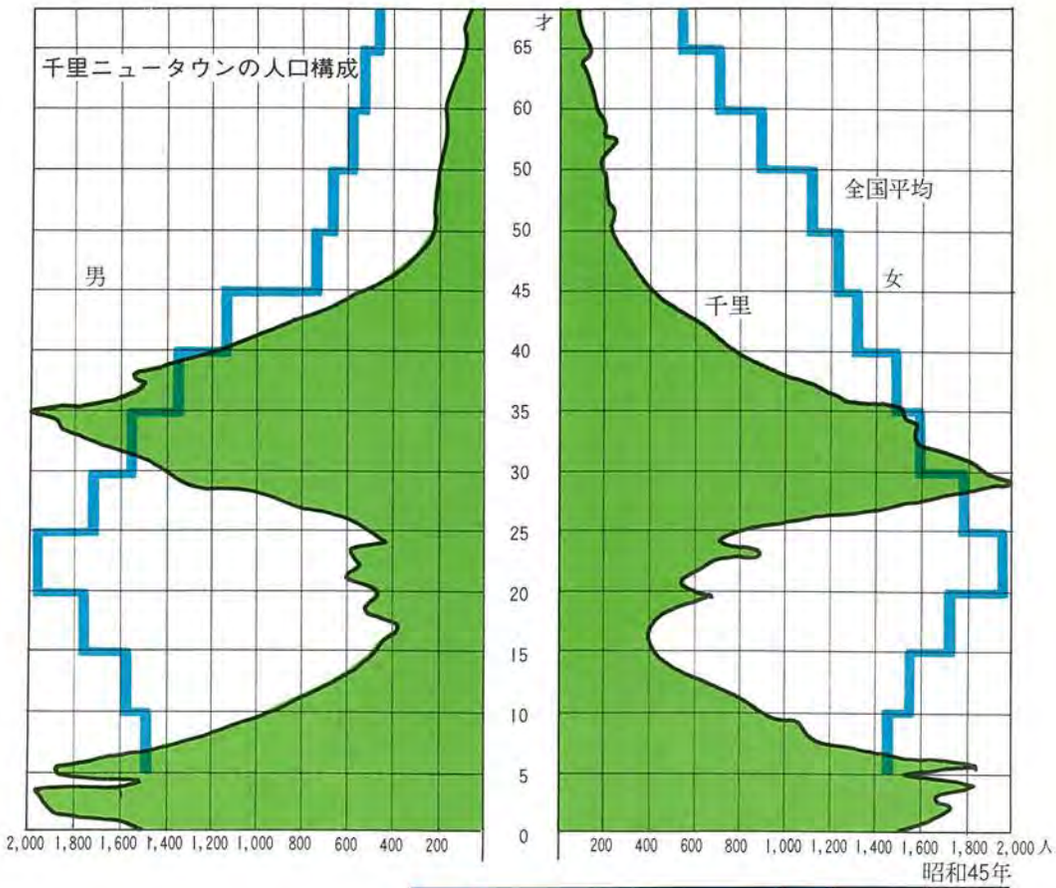
大阪府全体の年令構成とくらべると、千里は20才代と40才代の人口割合が府下の2分の1しかなく、0才～4才と30才～34才が逆に2倍となっていて、千里は若い世帯のまちといえよう。しかし、一戸建住宅層では、世帯主の年令が比較的高く、全般にいろいろな年令層をふくんでいて、多様なコミュニティをつくりだす条件をもっている。

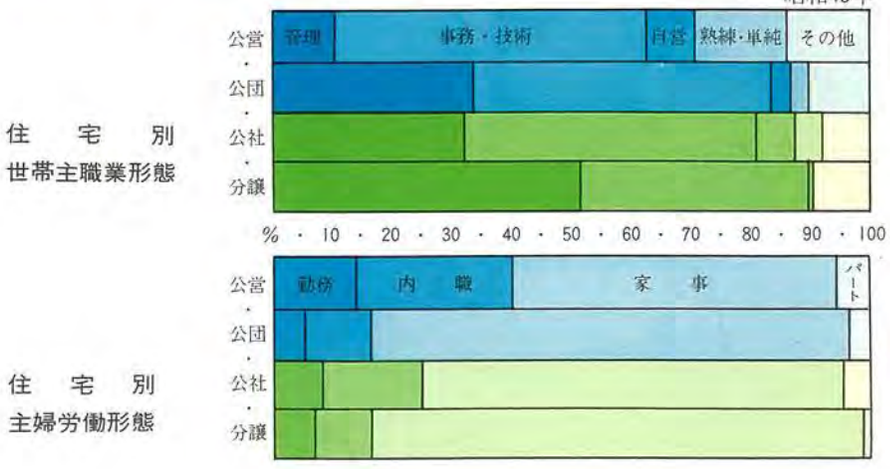
6. 職業 (8割が事務職と技術職)

千里ニュータウンの人びとは、事務、技術職や、管理業務に従事する人が80パーセントを占めている。

大阪府全体の場合とくらべると、技能工、生産工程従事者が少ないのが特徴的である。

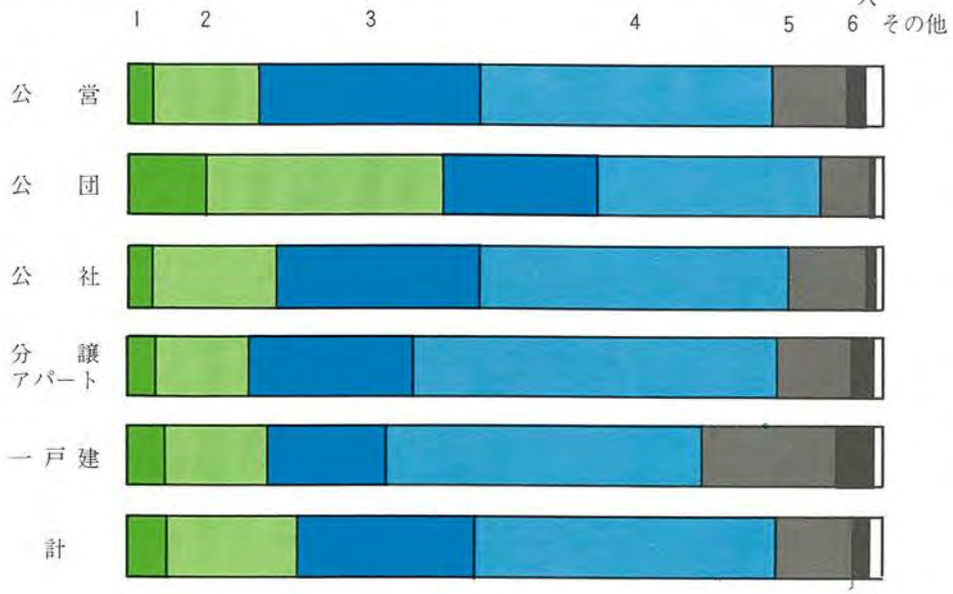
主婦は80パーセント近くが家事に専従していて、女性の勤め人は意外に少ない。若い夫婦の場合は、共働きも多いが、1人～2人の幼児をかかえている世帯が多いので、主婦は育児に追われて外へ出にくい条件にあると思われる。しかし、内職をしている主婦が、勤めを持っている人の2倍もある。







住宅別世帯人数分布



7. 家族　（若夫婦と子ども２人）

ニュータウンに入居がはじまったころ、１家族の人数は２人～３人が多かった。

それから10年を経過した昨今は、４人家族がもっとも多く、40パーセントを占め、どの住宅層でも、４人家族がピークを示している。

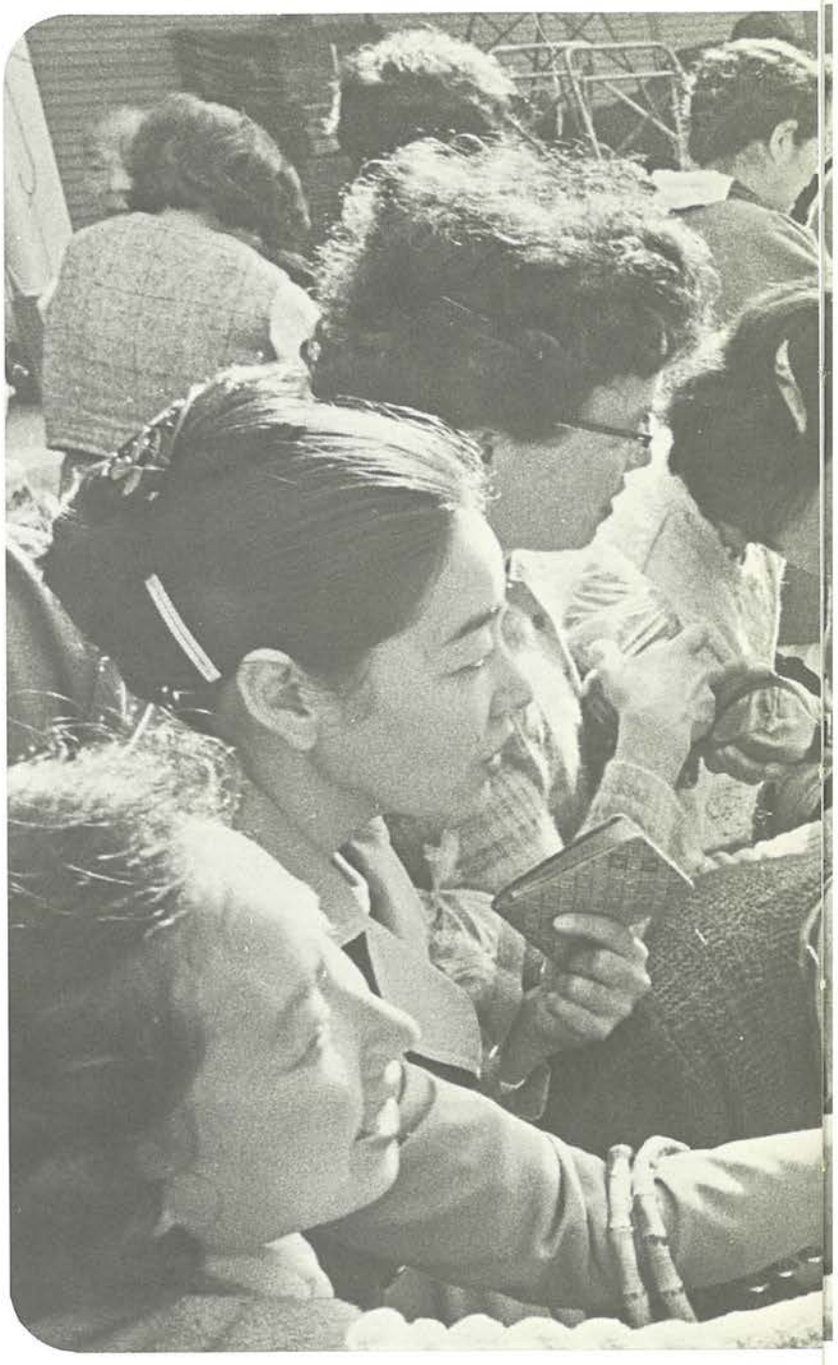
一戸建住宅層では、５人～６人家族の率が、ほかにくらべて高いが、公営、公社、公団の賃貸住宅層は、住宅の広さから４人が限度とよみとれる結果になっている。

家族の型は、若夫婦＋子ども１人～２人がもっとも多く、夫婦中心の核家族型になっている。

居住年数が長くなると、当然第１子の年令も高くなるが、現在のところ、子どもは小学生と就学前の幼児が大半を占めている。

一戸建住宅層には、成人したり、すでに独立してしまった子どもがある世帯が他の層より多い。







■第３章

千里ニュータウンの生活

通勤・通学

1. 外出　（通勤、通学、買物がおもな目的）

幼児をのぞく千里ニュータウン居住者は、ほぼ1日1回以上外出しているようで、その目的の40パーセントは通勤のためである。

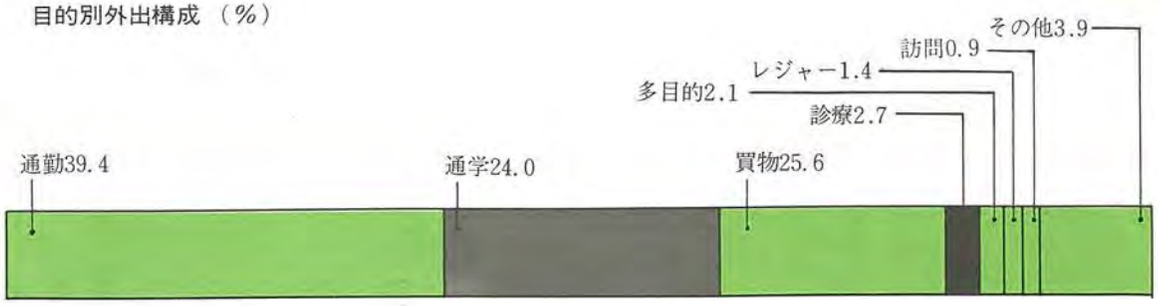
通勤、通学、買物の3つの目的による外出を合わせると約90パーセントとなり、千里ニュータウン内でのほとんどの行動が、この3つで占められていることになる。

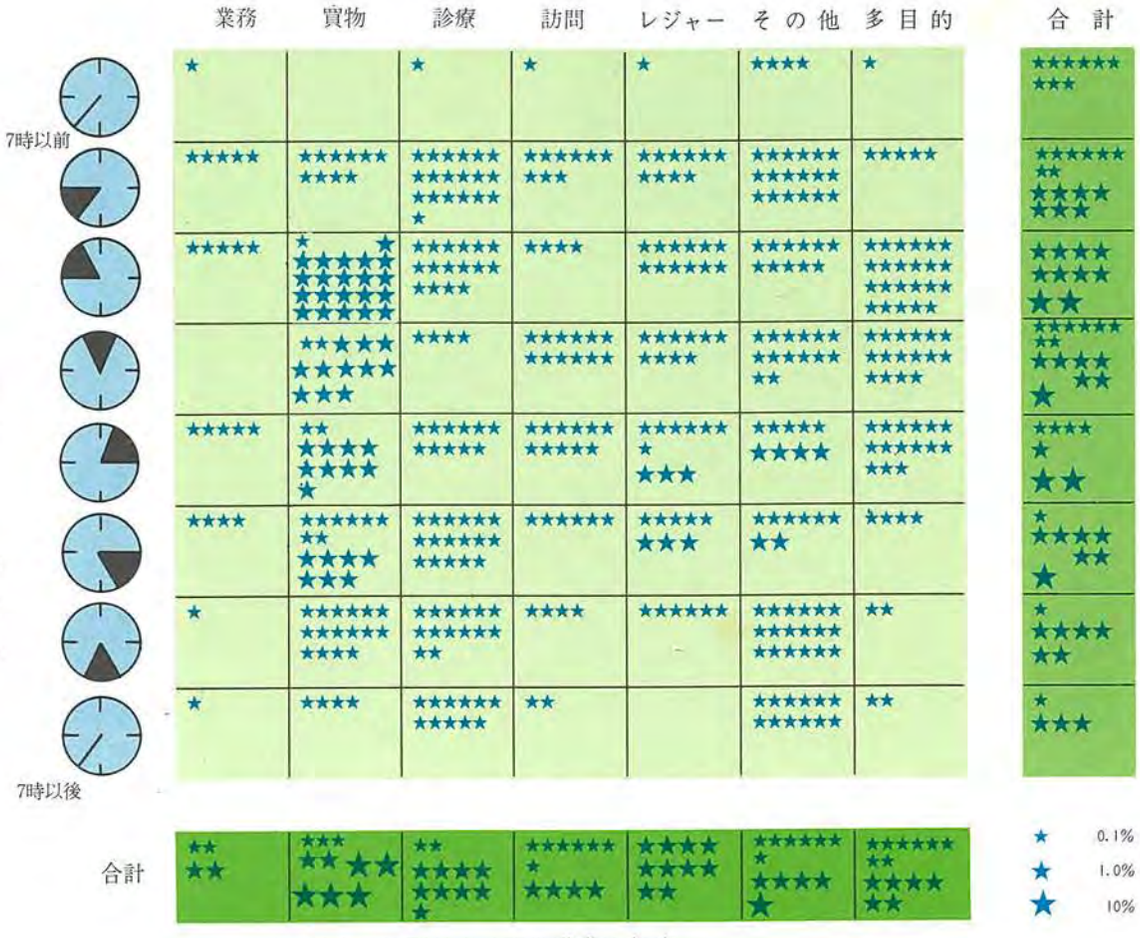
通勤、通学以外の外出は、夕方までに行われるのが普通で、夜、レジャーに出かけたり、友人宅を訪問したりすることの多い一般市街地とちがって、千里は「昼行族」のまちといえよう。

買物は昼までにすませ、訪問は昼すぎ、レジャーは3時から5時というのが、千里ニュータウンでの一般的な外出のかたちである。

セールス、配達などの業務目的や多目的の外出が少なく、とくに日中のニュータウンは「買物」のまちとも呼べそうで、昼前ごろ、このまちのいたるところで見かける人の10人中8人は、買物のために動いていることになる。

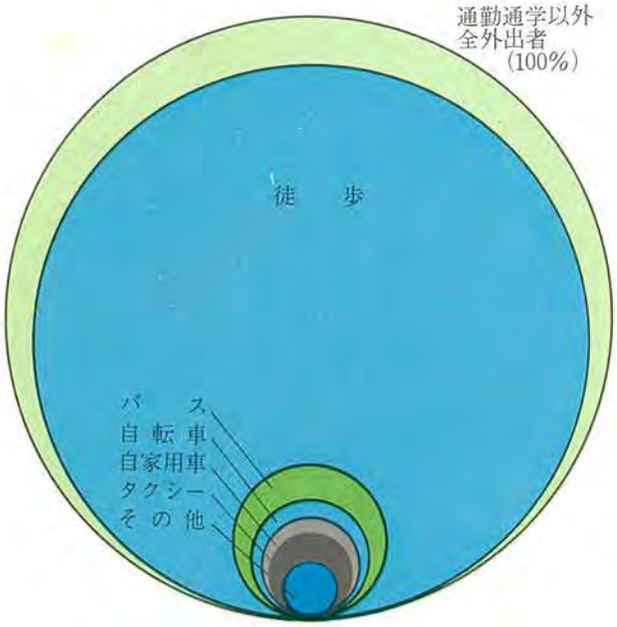
目的別外出構成（%）





通勤・通学以外の外出目的別外出時間帯構成比（%）

通勤・通学以外の外出の交通手段



交通手段別利用者割合



2. 交通手段　（徒歩とバス）

昼間のニュータウン路上は女と子どもだけになるとよくいわれるが、そのことは、数字のうえにもはっきりとあらわれている。

昼間の歩行者の 4.8パーセントだけが世帯主であるから、残りの90パーセント強は奥さんと子どもということになる。おとしよりを見かけないのも特徴で、おじいさん、おばあさんは、全歩行者の24パーセントにすぎない。

千里ニュータウン内の交通手段は、歩くことに次いでバスが主である。その乗客も、やはり女性で、そのほとんどが、センターなどへ買物に出かけるためである。

自転車もよく使われるが、それはもっぱら小学生に多く、中・高校生がそれにつづき、千里ではチビッコ族専用の交通機関であるようだ。

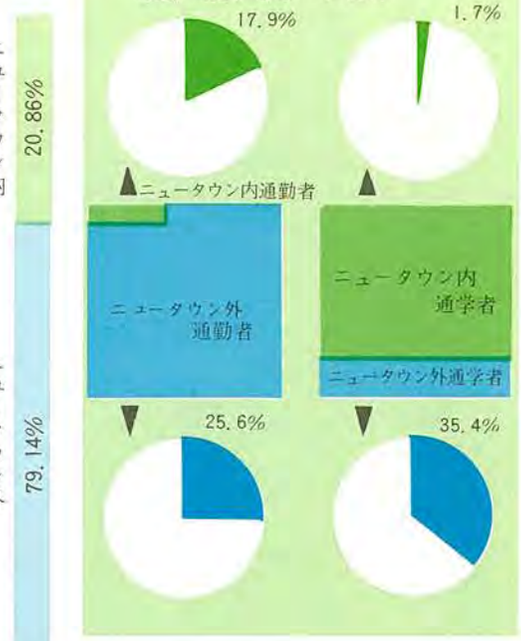
歩く範囲とバス利用の関係は、年令や、住んでいる住宅の種類によってもちがうが、平均すれば、500 m～700 m の範囲では70パーセント以上が歩くのに、700 m～1,000 m になると、歩く人は40パーセント以下になる。

したがって、700 m くらいが、徒歩とバス利用のわかれ目で、歩く限界は1,000 m とみてよいだろう。

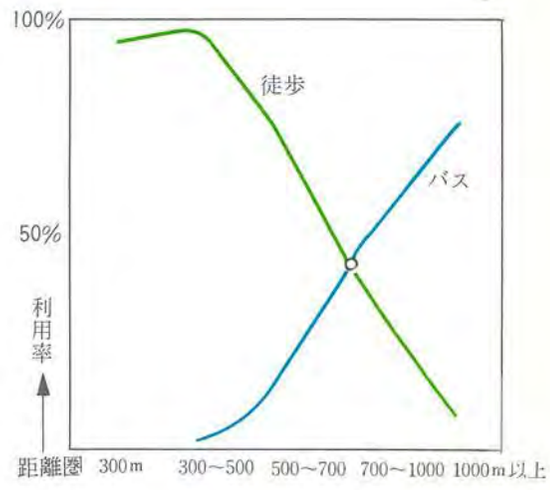
行きと帰りでは多少ちがっており、帰りにはバス利用が減っている。

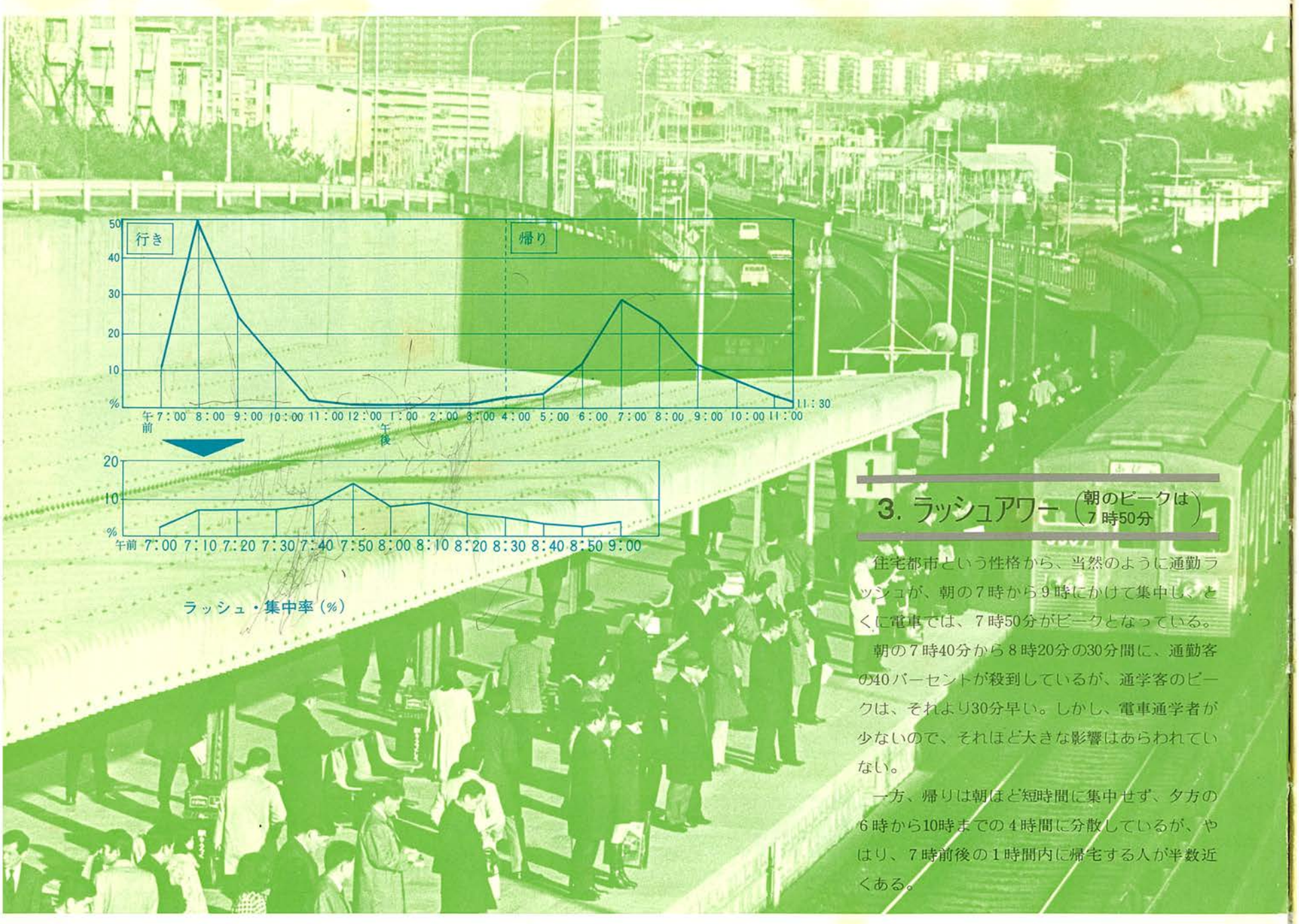
バス路線は、南・北・中央の各地区内を循環するもの、３つの地区を結ぶもの、さらに千里外へ伸びるものの３種類がある。

バスの利用実態



行先別バス利用
（バス利用者全体100%）





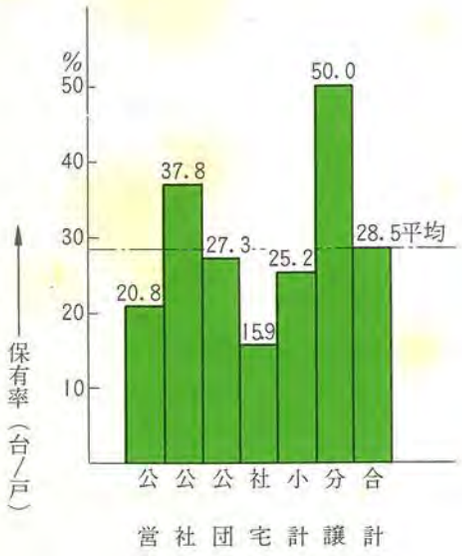
3. ラッシュアワー（朝のピークは7時50分）

住宅都市という性格から、当然のように通勤ラッシュが、朝の7時から9時にかけて集中し、とくに電車では、7時50分がピークとなっている。

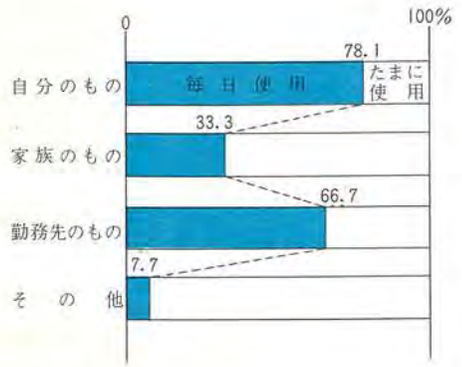
朝の7時40分から8時20分の30分間に、通勤客の40パーセントが殺到しているが、通学客のピークは、それより30分早い。しかし、電車通学者が少ないので、それほど大きな影響はあらわれていない。

一方、帰りは朝ほど短時間に集中せず、夕方の6時から10時までの4時間に分散しているが、やはり、7時前後の1時間内に帰宅する人が半数近くある。

自家用車の保有率（台/戸×100）



所有形態と利用ひん度



4. 自動車 （ふえるマイカー利用）

電車やバスが計画的にととのっているはずの千里ニュータウンでも、クルマ社会を反映してか、自動車の保有率は年々上昇する一方である。

保有率は住宅の種類とともに、所得によっても大きな差がみられ、月収10万円をさかいに、保有率は極端に変化し、20パーセント台から50パーセントにはね上がる。

しかし、月収が10万円を越えると、保育率は、横ばいとなり、それ以後は、所得の上昇にともなってはかならずしもふえず、むしろ減少する場合もある。

全般に、「もっている」ことと「使う」こととは、一致しないことも多いようで、自動車所有者の40パーセント近くは、たまにしか乗らない「日曜ドライバー」である。

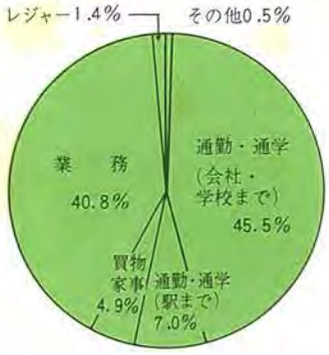
毎日車に乗る人と、そうでない人とでは、車を使う目的にもちがいがみられる。

毎日乗る人は、やはり、通勤・通学用か業務用が大部分である。たまに乗る人はレジャー用がもっとも多いが、業務用や買物にも使っている。

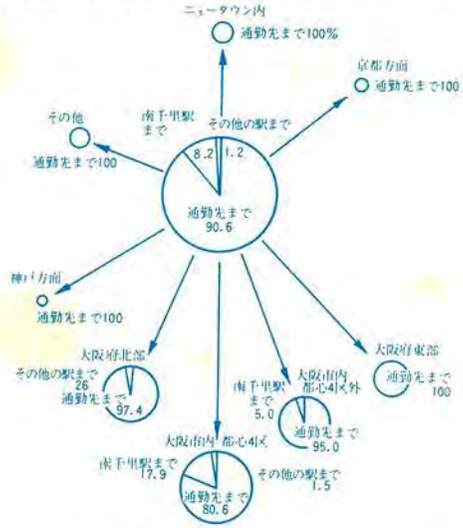
いずれにしても、千里ニュータウン内の車利用は、レジャー用よりも、むしろ仕事用の方が多いと思われる。

アメリカの郊外都市などにみられるように、駅まで自動車を使い、そこから都心へは電車を利用するという「キス・アンド・ライド」方式は、まだ少なく、ニュータウンから都市へ、そのまま車を乗り入れて、さらに、その車を使って仕事をする人も多い。

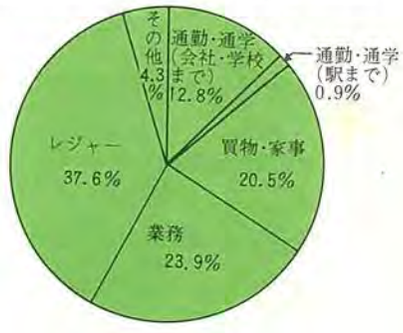
毎日使用している人の全利用者構成図

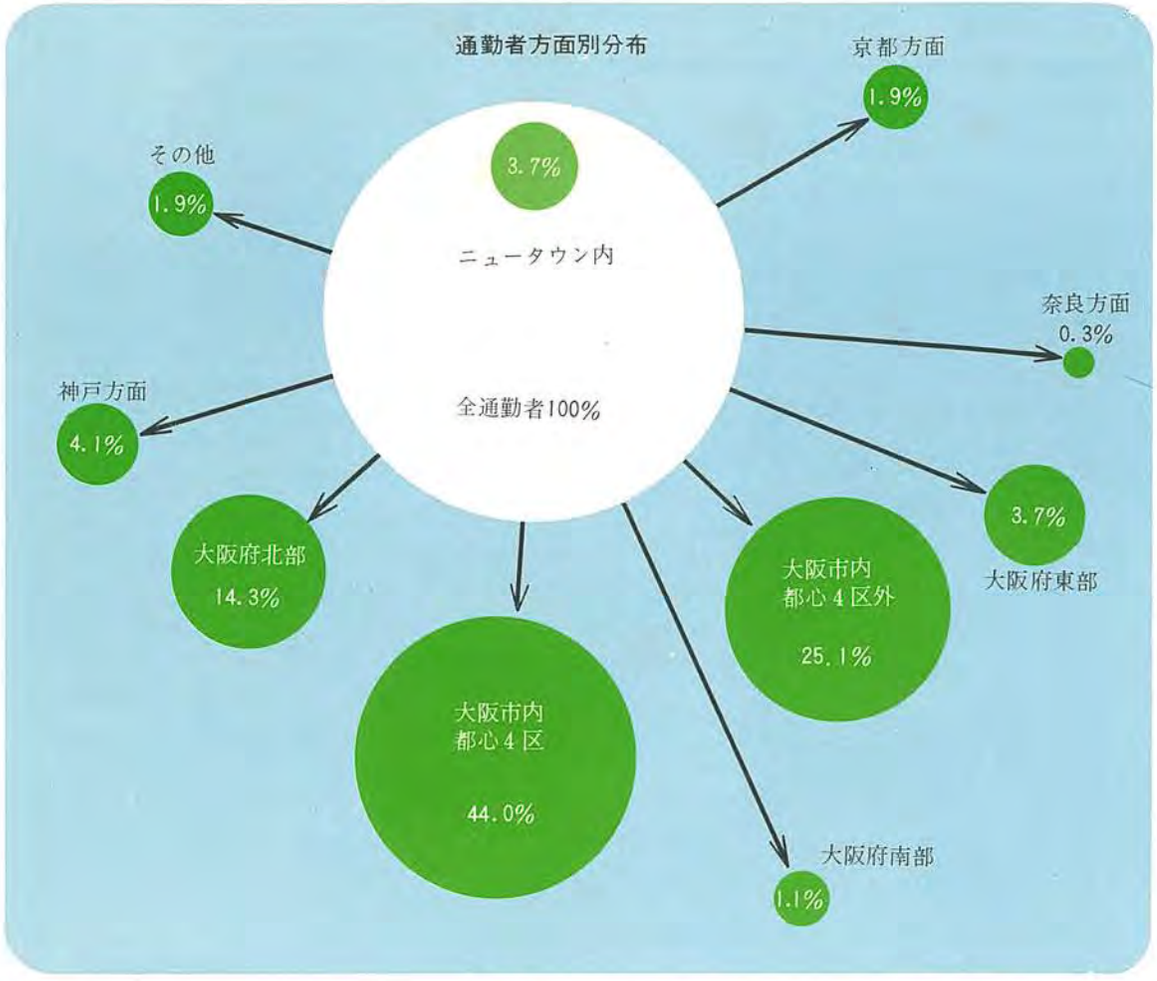


通勤先別自動車利用状況（行きのみ） %



たまに使用する人の全利用者構成図





5. 通勤　（7割は大阪市へ）

千里の通勤者の勤務先は、大阪市の都心4区(御堂筋を中心としたビジネス街）が、全体の44パーセントを占め、4区外の大阪市内を合わせると約70パーセントとなり、職場を都心に依存している千里ニュータウンの特徴がよくあらわれている。

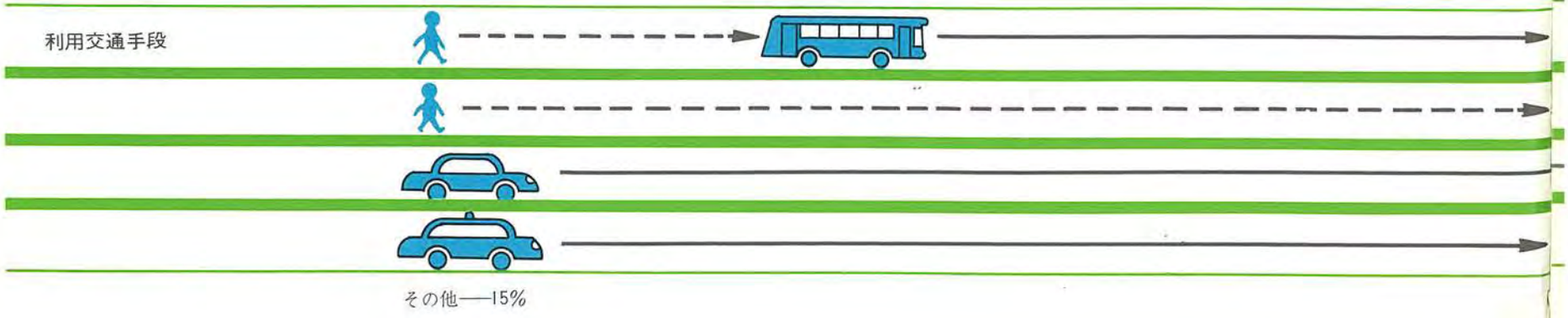
ニュータウン内で働いている人は、わずかに3.7パーセントで、そのほとんどは社宅に住むサービス関係就業者である。

通勤者が利用する交通手段は、駅まで徒歩、バス、自家用車で行って電車に乗る場合と、電車以外のものを利用する場合の4つの経路に分けられる。

電車利用者の約半数は駅まで歩き、他のほとんどは駅までバスを利用しているようである。マイカー、タクシー、自転車の利用も少しはみられるが、ごくわずかである。

しかし、..時途はタクシー利用が増え、改札を出た人のうち12パーセントがタクシー乗場へ向う。

交通手段は、バス路線の有無で大きなちがいがあり、バス路線のないところでは8割以上が、徒歩にたよっている。



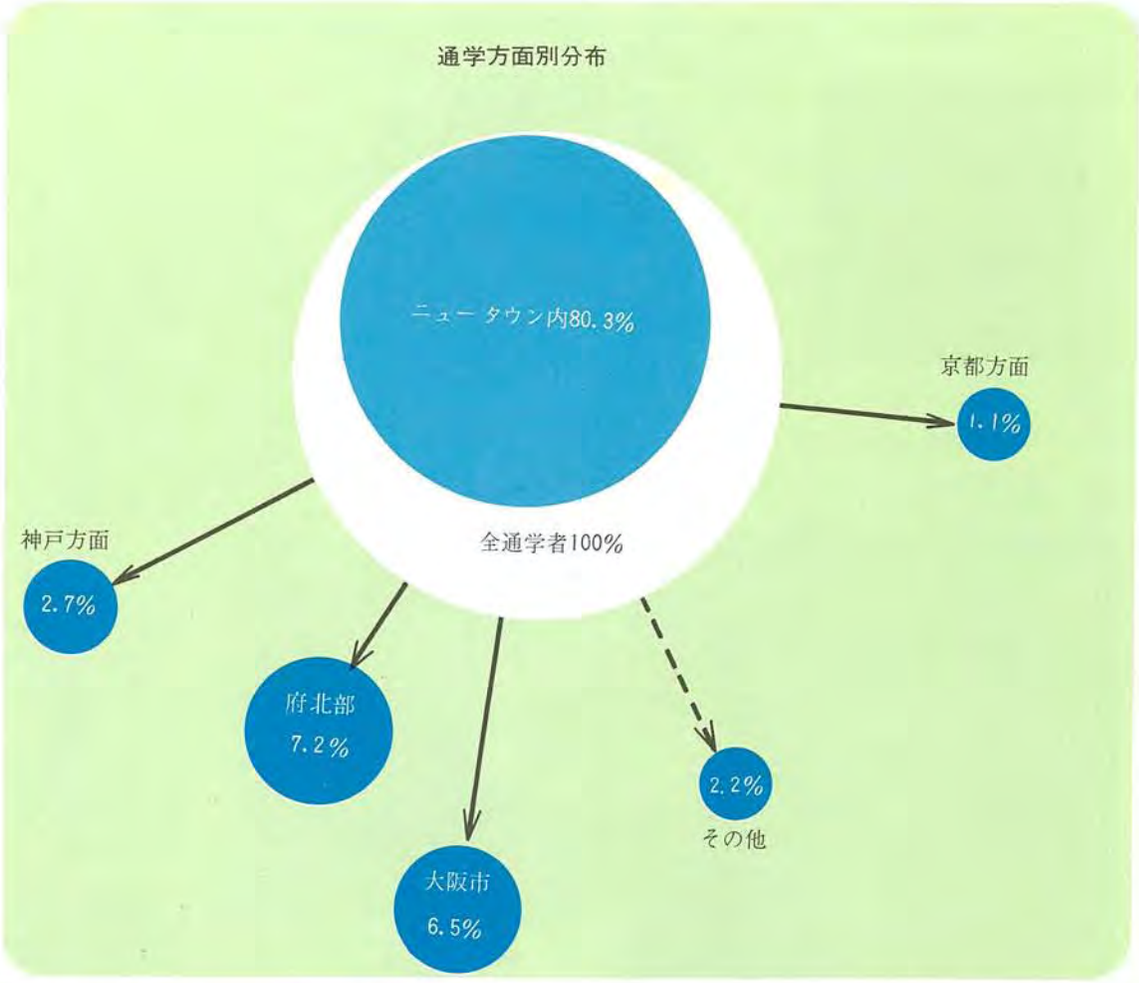
6. 通学 （ニュータウン内の学校へ）

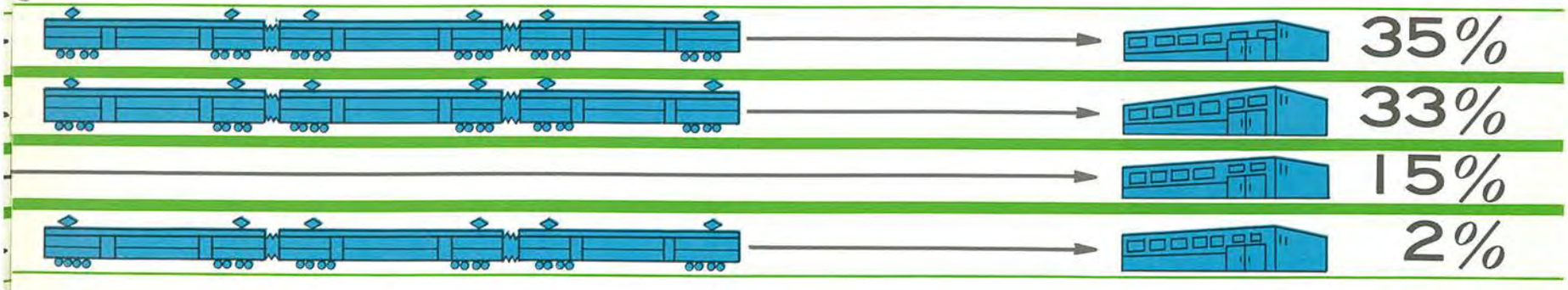
ニュータウンの子どもの年令層が、0才～9才に片寄っているために、通学者層はニュータウン内通学をする小・中学生が圧倒的に多く、外への通学は少ない。

小学生から大学生までふくめた通学者の、80パーセントがニュータウン内にかよっており、しかも、そのほとんどが徒歩通学である。

バス利用は4.4パーセントしかなく、学校を徒歩圏内に配置した計画の成果であろう。

自転車は、ほとんど通学には使われず、千里の子どもたちにとっては、交通手段より遊び道具であるようだ。

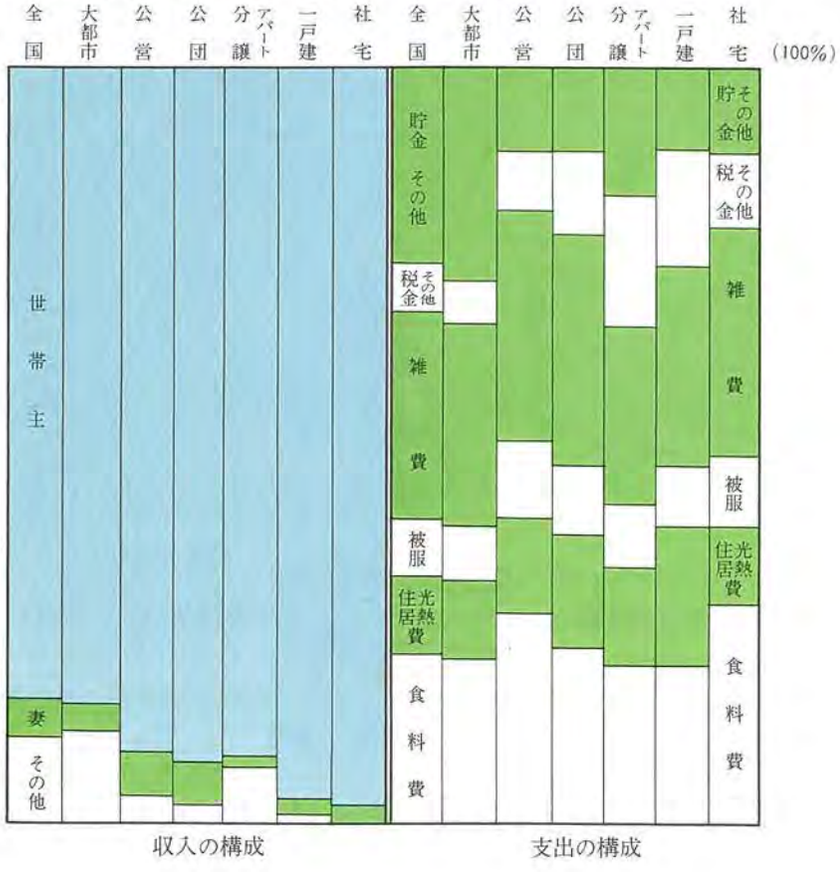




平均月額収支比較

	収　入	支　出
全　国	10.2 万円	9.4 万円
大　都　市	10.8	10.0
千里ニュータウン	13.6	12.9

収入と支出の構成（全国・大都市・千里の比較）



買　物

1．家計　（収入も多いが支出も多い）

千里ニュータウン全世帯の平均実収入は、月額にして13万6,000円で、全国平均10万2,000円をはるかにしのぐ高額である。

しかも、その収入のほとんどを、世帯主がささえているのが特徴的である。とりわけ、社宅層、分譲アパート層、一戸建住宅層にその傾向がつよい。

しかし、主婦が働いている世帯では、パートタイムや内職で全収入の約15パーセント、終日勤務で30パーセントの家計を、その働きでおぎなっている。

収入も多いが、支出もまた12万9,000円と、全国平均の9万4,000円を大きく越えている。

公営、公社、公団などの借家層は、家賃に、一戸建住宅など持家層は、設備、修理や家具購入にと、住居費に大きな支出をしている。

これは、ニュータウンの住宅は新らしいものばかりであるため、家賃が大都市平均にくらべて高いこと、持家層は、新築住居のためいろいろと家の内外をととのえるからである。

このような住居光熱費の増大は、借家層では家具類の購入をひかえ、持家層では、その分だけ教養娯楽費の支出をへらしていると思われる。

また、持家層には、土地や家屋を買ったときの借金の返済金が、生活費以外の支出として、大きな割合を占めていることも見のがせない。

少々収入が多くても、支出の多い家計の残高は、当然少なくなる。

住居光熱費の出費がひびくためか、ニュータウン世帯の貯金額は、全国平均よりかなり低くなっている。そのなかで、家の設備や修理費がほとんどいらない分譲アパート層の貯金額だけが、ようやく全国水準に達している。

2．買物施設 （3段階に構成されている）

千里ニュータウンでは、このなかで一応すべての日常生活に必要なものがそろえられるように、買物施設が計画されている。

丘陵地にひらかれた住宅地であるため、周辺とのつながりも少なく、ニュータウンだけで、ひとつの島のような自立性を持っている。

買物施設は、日々の買物の便を第一に考えられて、住区の中心に半径 500メートル以内の歩いて行ける場所に、原則として1つづつの近隣センターを設けている。

さらに、3～5住区をまとめて、南、北2つの地区センターがあり、そのうえに、千里全体のタウンセンターとしての中央地区センターと、3段階に構成されている。

これらの施設のほかに、露店や、車で住宅区内をまわる移動販売が、住民の間で人気をよんでいる。

買物・サービス施設数

		市役所出張所	郵便局	銀行・保険	デパート	スーパー	市場	食料品	衣料・雑貨	電器	薬・化粧品	書籍・スポーツ用品他	室内装飾	園芸・花	クリーニング	美容・理容	飲食店	新聞店	ガスショップ	浴場	タクシー発着場	運送
中央地区センター		1		5	2			19	39	3	4	18	8	2	1	5	120				1	
南地区センター		5		6		1		9	11	3	1	8	1	1	1	2	18		1		1	
北地区センター		1		4		2		4	11	2	2	10	2	1	1	4	7		1		1	1
近隣センター	津雲台		1			1		3	3	4						2	1	3				
	高野台		1			1	1	4	2	7						2	3	2		1		
	佐竹台	1	1	1			1	3	2	6					1	2	1			1		
	桃山台		1			1		7	2	5					1	2	5		1	1	1	
	竹見台						1	4	2	6					1	2	1	4				
	青山台		1			1		3		5					1	2	1			1		
	藤白台		1				1	4	1	6				1	1	2	1			1		
	古江台		1				1	4	1	3					1	2	1	5		1		
	新千里北町		1				1	4	2	5					1	2	5	5		1		
	新千里東町		1			1		3		5						1	2			1		
	新千里西町		1				1	5	1	6					1	2	1	1				
	新千里南町		1				1	3	1	5					1	2	2			1		

3．買物場所 （結局近いところへ）

買物には何といっても、歩いていちばん近いところが、もっともよく利用されている。

ニュータウン北部では、住まいから近隣センターまで遠い場合、さらに大きい規模の北地区センターや、中央センターへ直接行ってしまう人が多いのに、南部では、南地区センターや中央センターへ行くよりも、少し遠くても近隣センターを利用する人が多いようである。

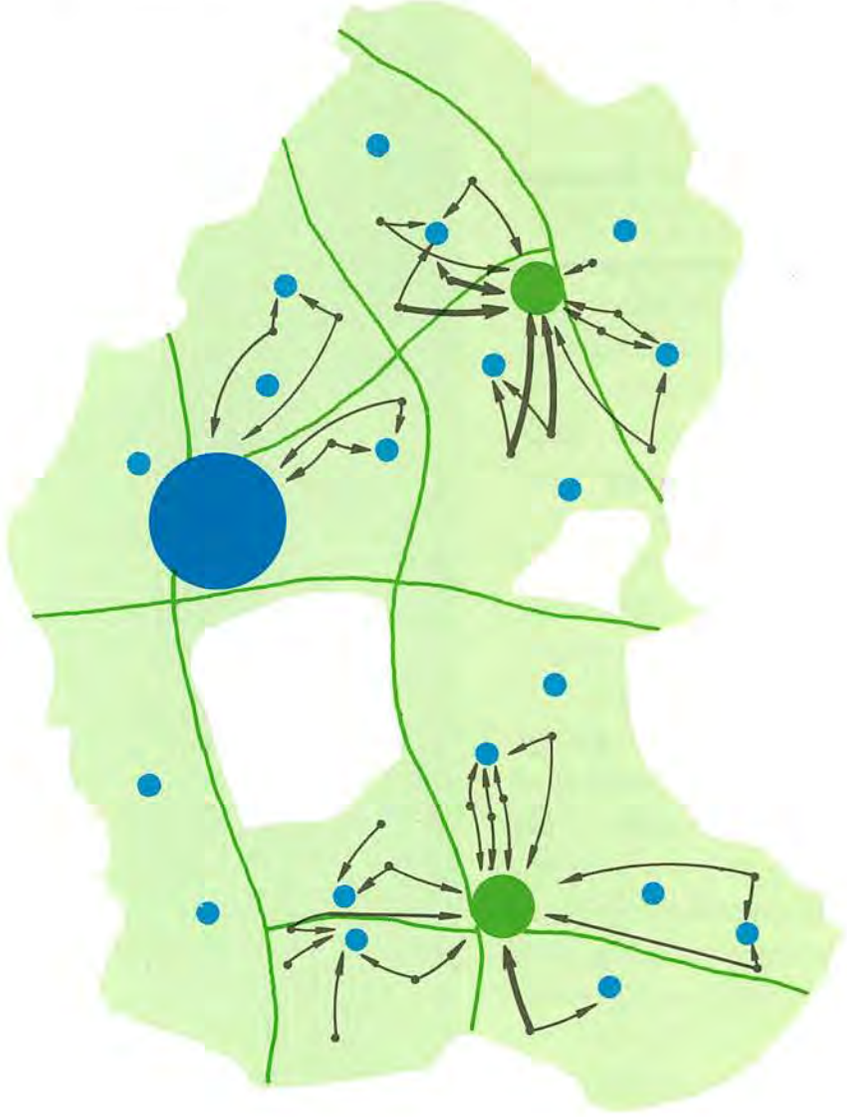
また、東北部から、中央地区センターへは、バスで北地区センターを経由しなければならないので、この地域では、中央よりむしろ、途中の北地区センターを利用することが多い。結局、バスを利用してまで、より大きいセンターへ買物外出が集中することはないといえる。

マイカーでの買物については、とりたてた特徴はみられず、まだ車は、一般の主婦の間で自由に使えるまでになっていないようである。しかし、車の利用がふえるにしたがい、千里の外への買物がふえる傾向はある。

住宅の種類別に買物場所のえらび方をみると、公営住宅層は、その位置が近隣センターに近いのでよく利用するというように、その住宅の建っている場所にもっとも近い施設をよく利用している。

共働きの世帯では、主婦の勤務先によって買物場所が決ってくる。勤め帰りに買物をする場合が多いので、交通の便のよい中央センター、地区センターや、都心デパート、商店街が利用され、買物時間の関係で、露店はあまり利用されない。

購買施設の利用 （太矢印は近隣センターより地区センターの利用が多い調査地点）





















4. 利用目的　（楽しみも多いショッピング）

●中央センター　ニュータウンのほぼ中心にある中央センターは、都心と直結した電車のターミナルでもあり、北大阪の副都心をめざす大型センターである。日常の実用的なショッピングより「気分転換をかねて」とか、「飲食をかねて」というように、レジャー型の買物客が多く、平日より休日利用者がだんぜん多い。手近かで安全なレクリエーションをかねて、休日には家族づれでにぎわう。

南部より北部の人がよく利用し、日常食品より衣類などの買物が多い。中央センター全体の消費の３分の１が被服費に対してである。

●地区センター　南センター、北センターの２つがあり、それぞれ電車の駅や、バス、タクシーの発着場も設けられている。銀行や郵便局などのサービス施設もあり、そこへの用足しもかねて、日常の買物に利用される。子どもづれの散歩や買物に、ほどよい距離にある。ここでは生鮮食料品の買物が主で、北センターでの買物の63パーセントが、南では54パーセントが食料品である。周辺の近隣センターの消費を、南、北地区センターが吸収してしまっているところもある。

●近隣センター　住区ごとに全部で14ケ所設けられている、もっとも身近かな買物施設である。もっぱら実用本位の日々の買物だけに利用され、もちろん生鮮食料品の買物がいちばん多い。

●露店　品物が安くて新鮮なので、近くに住む人びとから重宝がられ、近隣センターや地区センターをおぎなう役目をしている。ここでの消費の66パーセントが生鮮食料品に対してである。

5. 買物品目 （食料品は近くで、衣類は千里外で）

しょう油の80パーセントは自宅の周辺で買われているのをはじめ、肉、魚、やさい、卵、かんづめなど日常食品の86パーセントは、ニュータウン内の店でまかなわれている。ニュータウンの外では、品質に差のある緑茶が12パーセント分だけでほかはどれも3パーセントにもならず、ほとんどの食料品は、ニュータウン内で買われている。食料品は、「品質がよい」「家に近い」「安い」などの条件がそろった店がえらばれ、なかでも、しょう油は「配達サービス」を、かんづめは「種類が豊富」なところで買われている。

食料品は、全般に個人商店よりスーパーマーケットの方でより買われているようである。また、くだものの22パーセントもが露店でまかなわれている。

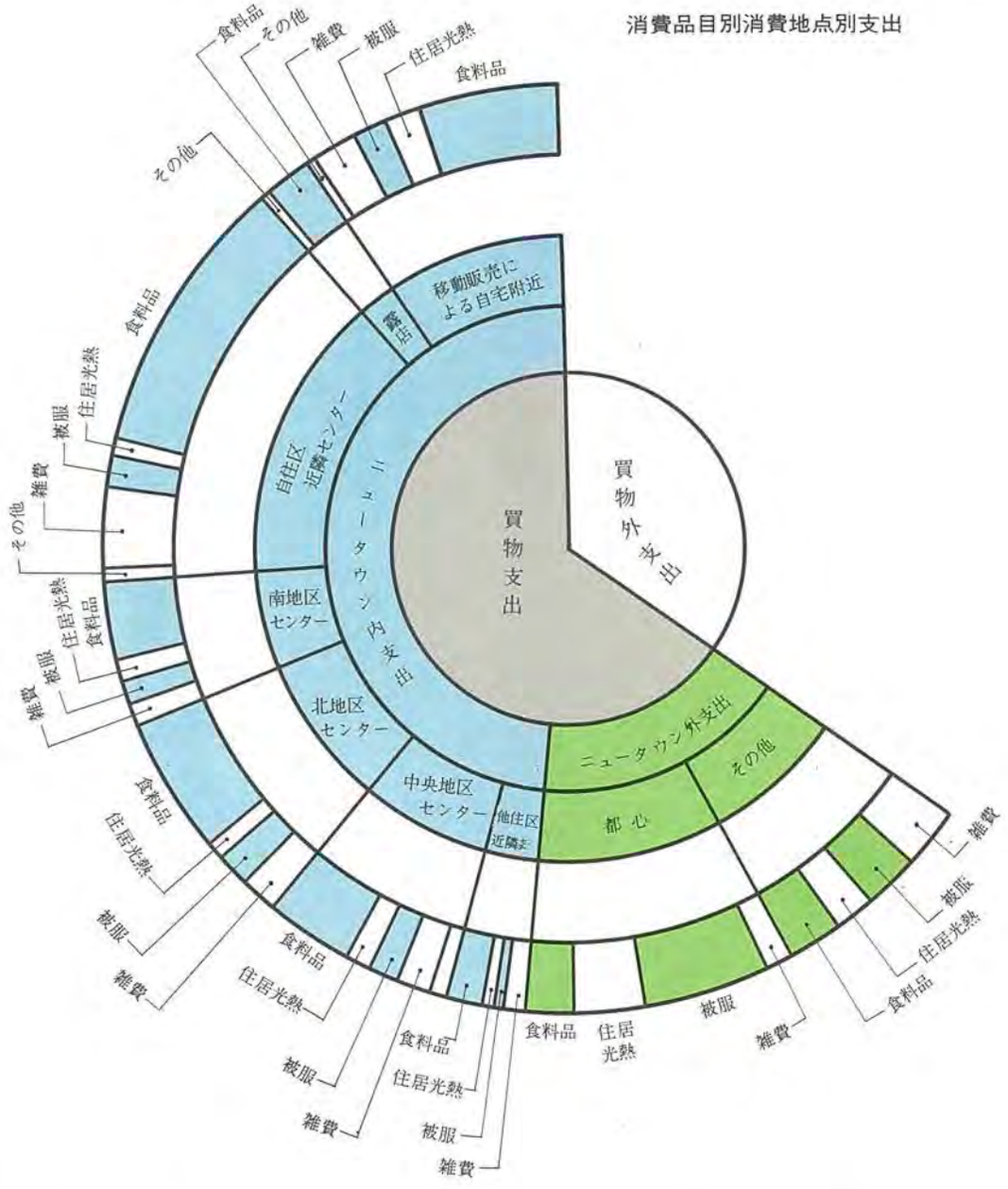
食料品以外のワイシャツ、婦人ぐつ、家具などの買物は、千里外の都心デパートや商店街で50パーセントも行われている。しかし、医薬品はニュータウン内の個人商店の利用が圧倒的に多く、電気製品、肌着も千里内で30～40パーセント買われている。

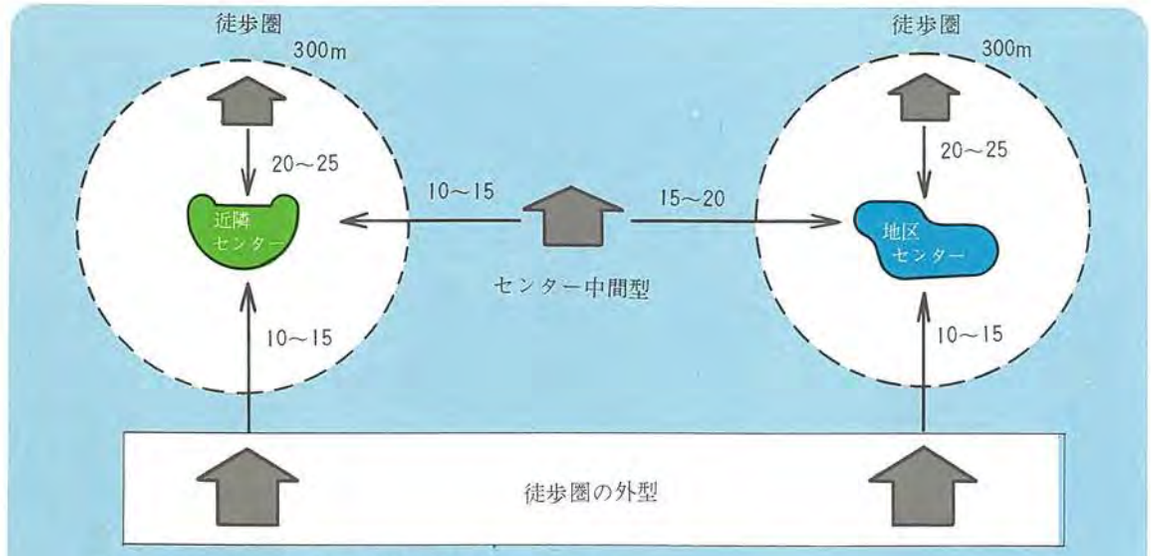
主婦が家事専従の世帯の食品の買物は、内職や共働き世帯より露店をよく利用し、衣類は、内職世帯が近郊沿線で、パートは地区センターでよく買う。

子どもや老人のいる世帯は食品だけでなく、衣類の買物にも近隣センターや露店をよく利用している。

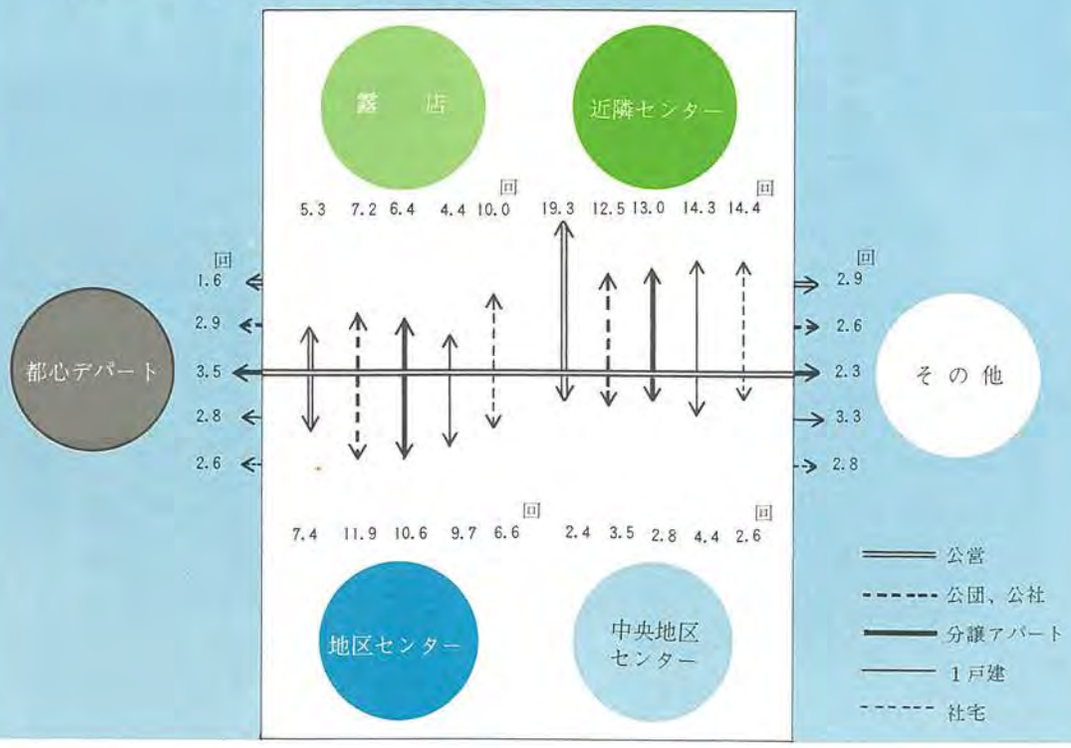
ニュータウンの人びとは、食品など買物の70パーセントはニュータウン内でしているが、あとの30パーセントは衣類、家具　教養娯楽品を求めて千里外へ出ている。全般に支出がふえると、ニュータウン内での消費比率が減り、千里外での支出がふえていくようである。

消費品目別消費地点別支出





消費地点別買物回数（数字は買物回数１月当り）



6. 買物回数　（近くへ何度もかよっている）

住まいが買物場所に近いほど、人びとは再三買物に出かけている。その回数は最高１ケ月間に47回、最低32回で、平均すると39.5回となり、１日１回以上買物に出かけていることになる。

地区センターと近隣センターの両方が近くにあるところでは、どうしても規模の大きい地区センターへ行くことが多くなり、両方の中間に住まいがあるときは、両方を適当に使いわけている。住まいから300ｍ以内に近隣センターがあると、１ケ月平均20回以上利用するが、500ｍを越えると10～15回に減ってしまう。

ニュータウン外への買物は、１ケ月平均5.5回、もっとも多いところで11.2回である。どうしても駅に近いところほど千里外へよく出ているようである。

共働きの世帯とそうでない場合とでは、買物回数の上での差はみられない。

近隣センターをよく利用する公営住宅層は、露店の利用も合わせて、１ケ月23～25回もかよっていて、距離的に遠い中央センターの利用が少ない。

分譲アパート層は主婦の年令が高いので（30～40代）外出しやすく、都心や千里外が多い。

一戸建住宅層は施設に遠いため、近隣、地区両センターの利用回数が２分されている。一戸建住域は、世帯の密度がまばらであるため、露店などが近くになく利用回数も少ない。社宅層は買物に不便な場所に建っているのが多く、その不便さをおぎなう露店をよく利用する。また、車で直接大型センターへ行ってしまうようで、中央での買物回数が多い。

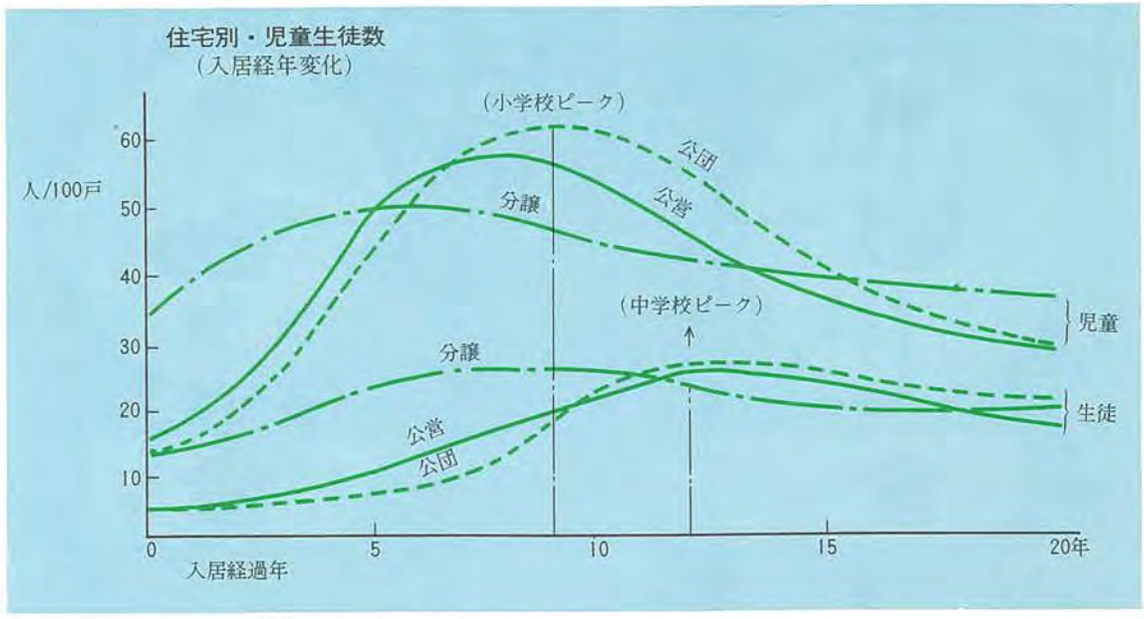
教育と文化活動

1. 学校　（児童、生徒がふえて過密）

小学校は、それぞれの住区に１校づつと、児童数のふえたところに増設して、合計13校ある。

千里では、住宅が建てられるといっせいに入居するので、学令期の子どもも急にふえ、教員１人当りの児童数は34人と、やや過密状態である。子どもがふえるにしたがって、今後さらに教室が不足することも考えられる。

中学校は７校（うち私立１校）、高等学校3校(私立１校)、それに、短大（私立）が１校、千里ニュータウン内に設けられている。



2. 幼稚園　（３割が他住区へ）

ニュータウンには、全部で13の幼稚園があるがそのうち公立は２つだけで、あとは全部私立である。

通園させている世帯のうち、住まいから近い自住区の幼稚園へかよわせているのは70パーセントで、遠い他の住区の幼稚園へかよわせている世帯が、30パーセントもある。

幼稚園へは、歩いてかよえるのがいちばん望ましいけれど、近くの幼稚園の定員が少なかったり、設備や、教育方針などの問題がからみ合って、他住区への通園が多くなっているものと思われる。



通園先分布



3. サークルクラブ活動（集会所を活用）

「千里野鳥を守る会」「千里自然に親しみ保護する会」など、趣味と社会活動をかねたものや、「短歌会」「俳句会」、それに「ママさんバレー」「野球クラブ」「テニスクラブ」「体操グループ」などのスポーツクラブ、読書会、コーラスなど、千里のサークル活動は多彩である。そのほか、いわゆるおけいこ教室もあるが、他の一般市街地にくらべて、ピアノ教室だけがさかんで、お茶、お花、洋裁などは３分の１から10分の１しか利用されていない。

これらの活動やけいこごとには、あちこちに設けられている集会所を利用するのが千里では普通になっている。集会所は大小あわせて73ほどあり、人びとのつどいに大きな役割を果している。このほか、ＹＭＣＡ、青少年の家、婦人会館などがある。

4. 宗教　（信仰への関心が薄い）

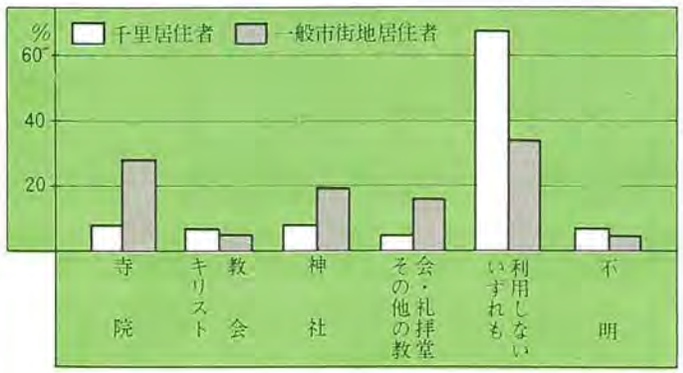
千里には宗教施設とよばれるものはほとんどないが、そういう施設をまったく利用しないという人びとが67.4パーセントもある。住民の年令が、他の都市より若く信仰への関心が薄いためだろう。

5. 図書館　（巡回図書だけにたよっている）

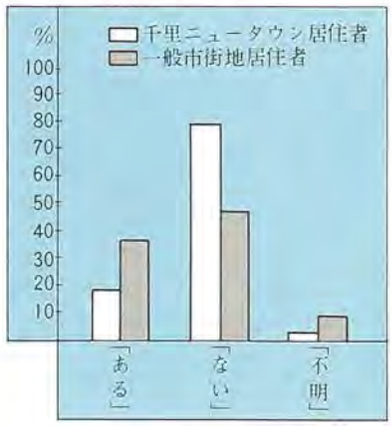
比較的収入が多く、学歴の高い層が多い千里ニュータウンに図書館が１つもないのは、住民の不満となっている。他都市にくらべて図書館利用が半分というのも近くにないからである。現在豊中、吹田両市立図書館からの巡回図書にたよっている。



宗教施設利用率

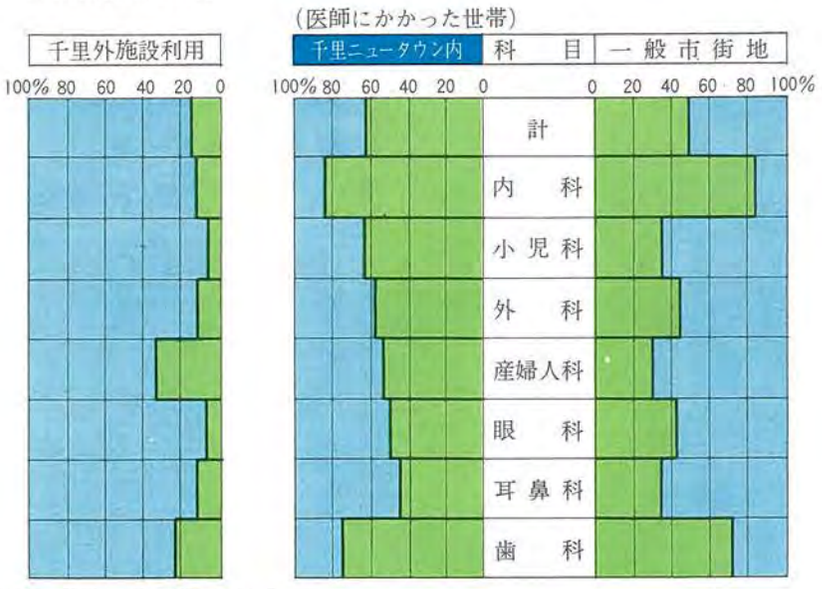


図書館利用の有無





医療施設利用状況



（医師にかかった世帯のうち）

住民サービス

1. 医療　（内科は近くで 産婦人科は外へ）

住区ごとに、開業医を1ケ所にまとめた医者村ともいうべき診療所を設けて、人びとが、近くですぐ医者にかかれるよう、ニュータウンの医療施設は配置されている。それに、総合病院が1つ、保健婦駐在所3ケ所が設けられている。

ニュータウン内では、各住区に定められた場所以外での、自由な開業はみとめられていないので一般市街地にくらべて医療施設は2分の1から3分の1と少ない。

しかし、ニュータウン世帯の60パーセント以上が、日ごろ医者によくかかっており、利用者が少ないわけではない。なかでも、世帯が若いので、小児科、産婦人科にかかることが多い。

自住区の診療所を利用する人が70パーセント、他の住区まで足を運ぶ人が16パーセントあり、千里内の医院にも行くが、千里外の医者にもかかるという人が25パーセントもある。一般に駅に近いほど、収入の多い層ほど外の医者にかかることが多く、医師や設備に不満のつよい科目、自住区に求める科目のないときも、千里外へ行きやすい。内科、眼科、耳鼻科、小児科は自住区でかかることが多いが、歯科、産婦人科は千里外が多い。これ以外の民間医療「はり」「あんま」などの施設はニュータウンにはほとんどない。

2. 福祉　（保育所と老人ホーム）

社会福祉施設としては、大阪府下全域を対象とした老人ホームが2ケ所、老人集会所1ケ所、そして、保育所が現在8ケ所（公立4，私立4）である。

保育所は目下さらに増設中で、各住区にひとつづつつくられる予定である。

保育所の利用世帯のうち、住まいから近い自住区の保育所へかよわせている世帯は30パーセント他住区へは20パーセント、ニュータウン外の保育所の利用が50パーセントとなっている。

現在、まだ住区ごとに保育所がないことや、保育時間、費用の条件が合わないことが、他住区保育園の利用を多くしている。また、ニュータウン外の保育所利用が半数を占めているのは、親の職場に近い施設をえらぶためである。

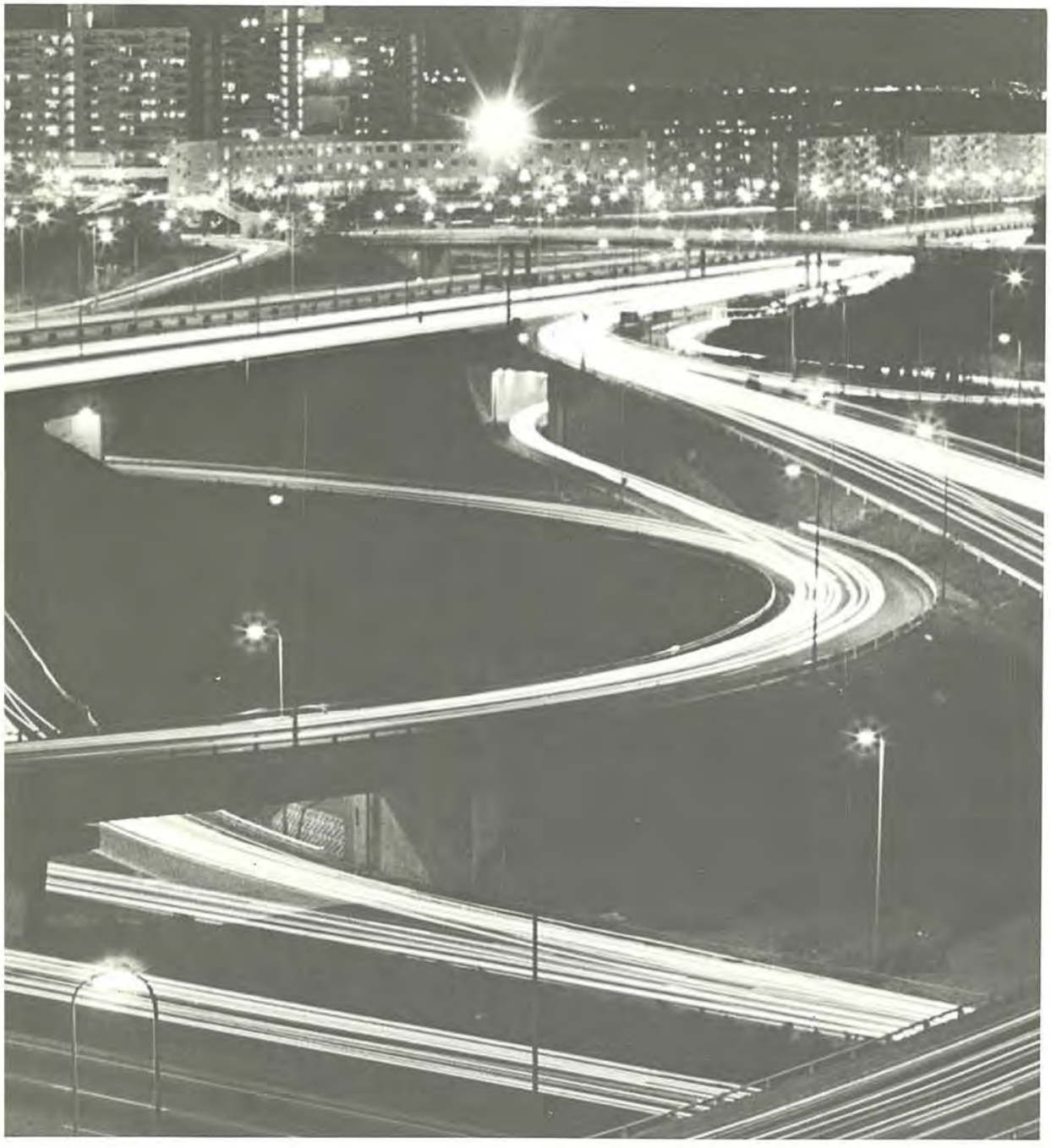
3. 交通サービス　（施設の半数は駐車場）

自転車預り所、駐車場、ガソリンスタンド、駅舎、タクシー営業所などの、交通施設は29ケ所と一般市街地よりかなり少ないのは、千里に産業がないからである。交通施設に当るものの半数が駐車場で、合計約2,000台分が設けられている。

年間、無料駐車場で95万台、有料で90万台、合計185万台の車が利用している。

これは、一区画当り、一日平均3台の自動車が利用していることになる。





4. 公共サービス（よくととのっている）

それぞれの住区の近隣センターや、地区センターにある郵便局を初めとして、電報電話局、電気、ガスサービスステーションなどの公共機関は、千里ニュータウンには配置よくととのっている。だが、郵便ポストの数だけは54と、他の一般市街地の２分の１しかない。

そのほか、警官派出所３ケ所、警察連絡所６ケ所、消防署２ケ所の保安施設がある。

千里ニュータウンの犯罪発生数は、１ケ月平均約50件で、そのほとんどが窃盗である。

火災は、ボヤていどのものが１ケ月１件くらいのもので、他都市にくらべて大変少なく、安全で平和なまちということができる。

5. 民間、個人サービス（大工さんがいないまち）

銀行、信用金庫、保険、美容院、理容院、公衆浴場、ホテル、クリーニングなどのサービス業務は合計86と、一般市街地よりはるかに少ない。

特に、クリーニングなどの個人サービス部門はほかの都市の10パーセントほどしかない。

千里ニュータウンは、産業をもたない住宅だけの都市であるため、昼間の人口が激減するので、個人サービス業がなりたちにくいこともある。

大工、左官、染物屋、運送店などは、ほとんどなく多くは大阪市内の施設を利用して間に合わせている。このほか、結婚式場、葬祭会館が、それぞれひとつづつ設けられている。



レクリエーション

1. 楽しみ　（四季の行事と娯楽）

千里ニュータウンは、数多い公園や、周辺の緑地の自然、プール、テニスコート、野球場でのスポーツ、それに、ボーリング場などでの室内娯楽と、3種類のレクリエーションの場がある。

それに、住民の自治会が主催する正月の「どんど祭」春の「千里子どもカーニバル」夏の「盆おどり」や「夜店」秋の「運動会」など、いろいろな催しものが、千里の年中行事として定着してきた。

人工の都市、千里のまちに、うるおいを与えるものとして、これらの催しは、住民の楽しいレクリエーションとなっている。

2. 室内娯楽（民間レジャーセンターが唯一のもの）

昭和47年11月に、民間レジャー産業の大規模施設「セルシー」が進出するまで、千里には、ボーリング場パチンコ屋などの遊戯場がまったくなかった

千里中央に、40軒の飲食店とともに、映画館、パチンコ、マージャン、ボーリング場、ゲームセンター、室内プール、インドアゴルフ、スカッシュなどを備えた、地下1階、地上6階、延5,000m²のビル「セルシー」ができて、千里ニュータウンの室内娯楽施設は急増した。ここへの入場者は平日で7,000人から1万人、休日3万から4万人で、平日は千里の住人がおもに利用し、休日は30～40パーセントが車での外来者である。

3. 公園　（身近な自然）

ニュータウンの住民だけではなく、附近の人びとも利用できるように考えられた、いちばん大きい「地区公園」が3ケ所（南・北・中央）、住区の人びとのための「近隣公園」が13，小学生のための「児童公園」22，幼児向き「プレイロット」81，と、たくさんの数と種類の公園が千里にはつくられている。

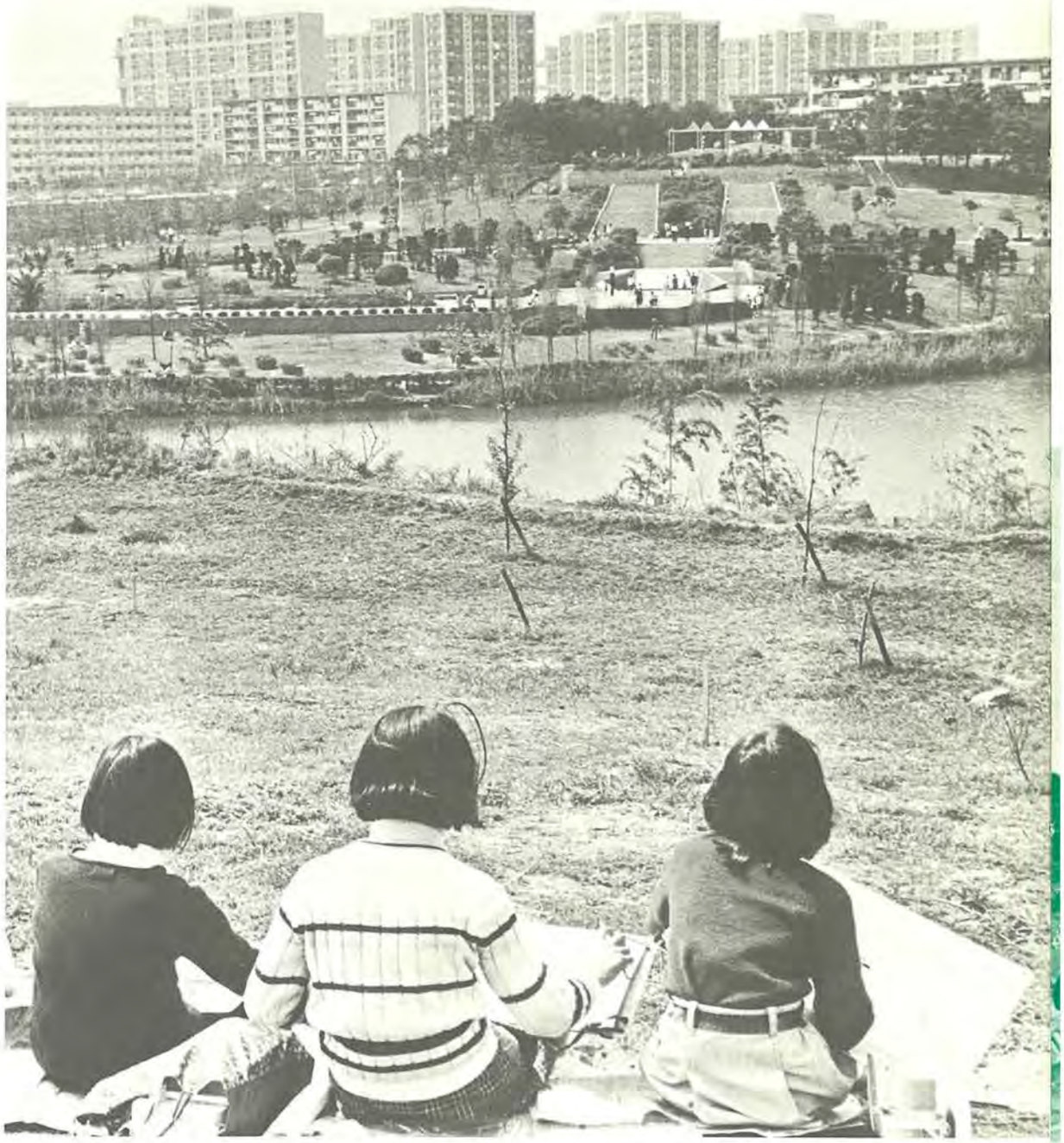
「地区公園」の平日は、買物の行き帰りの主婦と子どもや、下校途中の学生が、スポーツやゲームを楽しんでいる。また、小学生の写生会などの団体も目だち、おとしよりの散策、若いカップルのいこいの場となっている。

日曜日には、お弁当持参の家族づれでにぎわう地区公園は、近くに住む人がいちばんよく利用しているが、駅に近い南地区公園では、庄内、岸辺あたりの近郊からも訪れる人が多い。駐車場の広い中央地区公園は、平日に業務用車が、仕事の合間の休憩によく立ち寄っている。

「近隣公園」の平日は、やはり買物途中の母子、おとしよりの散策に利用されている。日曜日は、池のあるところでは釣人が列をなし、カメラをさげた親子づれ、青年がひとり読書を楽しんでいる。

このほか、ニュータウンの北部の周辺緑地のなかには、人びとが気がるなハイキングや散策を楽しめるよう、全長3，400mの遊歩道がつくられている

その緑地の一画には、宅地造成で追われた野鳥たちのために、5，000m²の緑を区切って小鳥の保護区とし、野鳥の保護につとめている。







4. スポーツ　（休日は大盛況）

テニスコート３ケ所、プール２ケ所、野球場２ケ所、貸ボート１ケ所などが、千里ニュータウンの屋外スポーツ施設である。テニスコートは、休日は１ケ月前から予約でいっぱいになり、平日は60パーセントから70パーセントの利用率である。１年のうち、10月がもっとも利用され、(205件)ついで５月（157件）、６月（151件）の順に多い。

野球場も休日はいつもふさがり、平日は30パーセントから40パーセントの利用率である。

貸ボートは５月が多く2,500人が利用している。

２つのプールのうち、規模の大きい北公園プールは、８月がピークで、９万人の利用者がある。６月20日～９月10日の期間中、平日約1,600人、休日5,000人、１日平均2,200人である。

小さい大和谷プールは、ピークの８月が1万3,000人の入場者を数え、平日500人、休日1,000人１日平均617人である。

自治活動

1. 住民組織（新らしい人間関係が育っている）

自治会をはじめ、管理組合、カークラブ、商店会、防犯協議会、消防団体、ＰＴＡ、婦人組織、こども会など、実にさまざまな住民組織が千里ニュータウンに生まれている。ことさら自治組織がつよいとはいいきれないが、今までの町内会のようなものではなく、自分たちのまちを住みよくしようという主体的な姿勢をもっている。人びとの間には、俗に団地の特質といわれているような、他家とは没交渉のつめたい関係ではなく、これらの組織を通して、近代的で新らしい近所つき合いや人間関係が生まれている。

2. 自治会（かたい結束で活ぱつに行動）

千里全域で、100を越える自治会があり、住宅種類別に、住区ごと、建設時期別に組織されている。

会の組織率は、公営、一戸建住宅に高く、社宅、公団住宅層は低い、また、各自治会の連合会をつくっているところもある。活動内容は、盆おどり、運動会などのレクレーションや、草とり、そうじなどの環境整備から、家賃値上げ反対運動、ゴミ焼却場建設反対、高層建築反対など、自治体や家主である公団・公社にせまる強力な運動もよくある。役員は選挙や順番制でえらばれ、１つの自治会加入世帯は230世帯ほどだが、50～200世帯のものがいちばん多い。



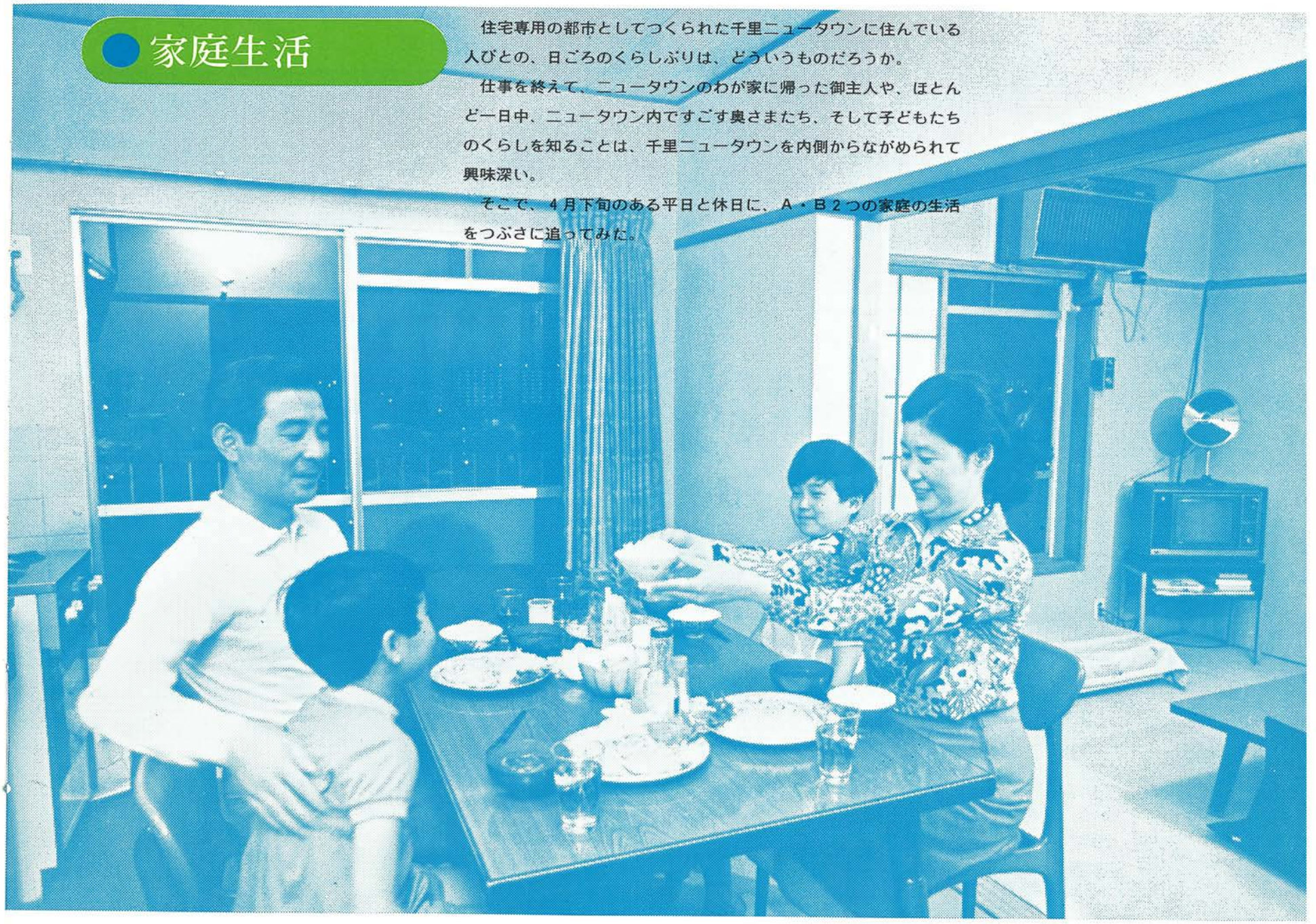


家庭生活

住宅専用の都市としてつくられた千里ニュータウンに住んでいる人びとの、日ごろのくらしぶりは、どういうものだろうか。

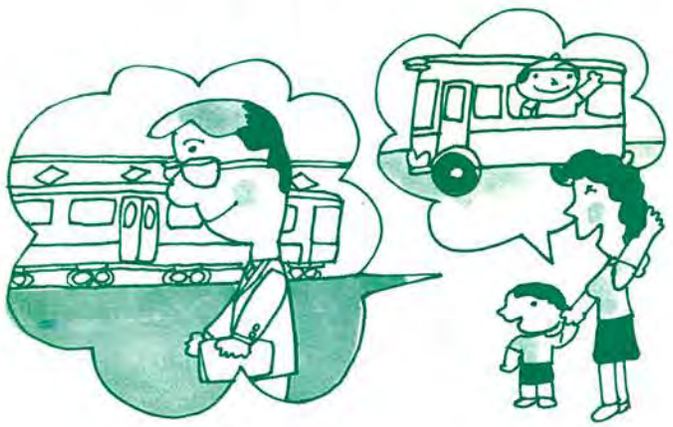
仕事を終えて、ニュータウンのわが家に帰った御主人や、ほとんど一日中、ニュータウン内ですごす奥さまたち、そして子どもたちのくらしを知ることは、千里ニュータウンを内側からながめられて興味深い。

そこで、4月下旬のある平日と休日に、A・B2つの家庭の生活をつぶさに追ってみた。









1. A家の場合

Aさんは結婚と同時に、千里ニュータウンの北部、青山台公団住宅に住んで7年になる。

大阪の保険会社の課長代理であるAさんは今年35才、奥さん（29才）と2人の男の子（5才と3才）の4人家族である。10軒が1棟になった5階建鉄筋アパートの4階3K（約48㎡）が、A家の根城である。

●平日

朝7時、Aさんは起きて新聞に目を通す。少しおくれて奥さんが起き出し、さっそく洗たく機をまわしながら朝食の準備にかかる。目をさました子どもたちに服をきせたり、みんなが食事をしている間も、部屋の掃除をしたり、奥さんの戦争のようなあわただしい時間の始まりである。

8時15分、Aさんは会社へ。歩いて6分の阪急北千里駅へ急ぐ。家を出て会社まで、約50分の通勤時間である。

8時45分、長男の幼稚園バスが、アパートの下へ迎えに来る。



Aさんと長男を送り出して、9時、やっと奥さんは、ひとりで新聞をよみながらの朝食となる。

食事もそこそこに、洗たく物干し、あとかたずけを終えるともう10時。日常の買物は一日おきにしているが、きょうは買物に行く日である。

二男をつれて、歩いて6分ほどの地区センターのスーパーマーケットへ。二日分の買物をして帰ってくると、アパートの入口で近所の人に出合い、しばらく立話をしてしまう。

近所つき合いはよく、特にそのうち3軒とは親しい。子どものこと、物価のこと、さまざまな話題に花が咲く。

長男が幼稚園から帰ってきたのを潮に、話を打ち切り、4階のわが家へもどるともうお昼である。昼食を終えると、長男はさっそく外へ飛び出していく。彼は、午後1時ごろから、暗くなる6時ごろまで、天気のよい日は外に遊びに出ると帰ってこない。

ここは、たくさんの友だちと、安全な遊び場に恵まれていて、子どもにとっては、本当によい環境である。自転車、ボールけり、どろんこ遊びなど、子どもたちは全身で遊んでいる。

二男は、午後3時ごろまでお昼寝をする。二男が寝ている3時すぎまでの1時間半が、奥さんのいちばん自由な時間である。

この日は、冬物の衣類をかたずけていたら、友だちから電話がかかる。今晩の献立の情報交換、子どものこと、御主人のこきおろしと、長々とおしゃべりを楽しむ。学生時代の友人2人が、同じニュータウン内に住んでいて、1日おきくらいに電話し合っている。長電話は何かと非難されるが、小さい子どもをかかえて身軽に出かけられない奥さまたちには、手近かなストレス解消や、レクリエーションとなっている。















3時すぎ、昼寝からさめた二男が、兄のあとを追って外へ出ていく。午後4時、そろそろ夕食準備にかかりだす。6時、頭から泥んこになった子どもたちが帰ってくる。すぐ風呂に入れて、さっぱりしたところで母子3人で夕食をとる。

7時からの子ども向テレビをみせて、8時すぎ、子どもたちをふとんに入れ、30分ほど絵本を読んでやる。

子どもたちが寝入ったのを確かめて、奥さんはテレビをつけ、見ながらアイロンがけをする。

午後10時、Aさんが帰宅。6時半頃、仕事は終えているが、日本古典芸能に深い趣味を持っているAさんは、週のうち何回かは夜、長唄のけいこにかよっている。その他、つき合いマージャン、英会話のレッスンなどで、帰宅はたいていこの時間になる。

おそい夕食をすませ、入浴を終えると、もう11時である。奥さんはあとかたずけを終え、少し読書をして、11時30分、先にやすむ。

Aさんはそれから歌舞伎や古代史の本を、12時30分ごろまで読んで床に入り、あわただしいA家の一日は終った。

●休日

休日のA家は、奥さんと子どもたちが、いつもより1時間おそい8時ごろ起きて、3人だけで朝食をとる。

Aさんは、子どもたちに馬乗りにされたり、ライダーキックの集中攻撃を受けて、しぶしぶ10時ごろ起きてひとりで朝食をする。

11時ごろから、一家で家の中の整理をする。せまいアパートは余分な物を置いておく余裕はない。しかし、これも子どもたちにとっては、父と一緒のレクリエーションでもある。

午後1時、そろっておそい昼食。そのあと子どもたちは外へ遊びに出かけ、Aさんは3時すぎまで書斎で仕事の調べものをする。その間に、奥さんはひとりで買物をすませる。

3時すぎ、夫婦だけでお茶をのんで、一息入れる。4時から奥さんは夕食の準備にかかり、Aさんは自室で長唄のおさらい。子どもたちが帰った午後6時、みんなで夕食のテーブルをかこむ。

食後、1時間半ほどテレビをみたあと、Aさんと子どもたちが一緒に風呂に入り、そのあと、子どもたちはすぐ寝てしまう。

Aさんは、それから12時ごろまで書斎で再び調べものや読書をする。一方、奥さんは、休日だけはひとりでゆっくり入浴して、そのあとテレビを見てくつろぎ、11時半頃先にやすむ。

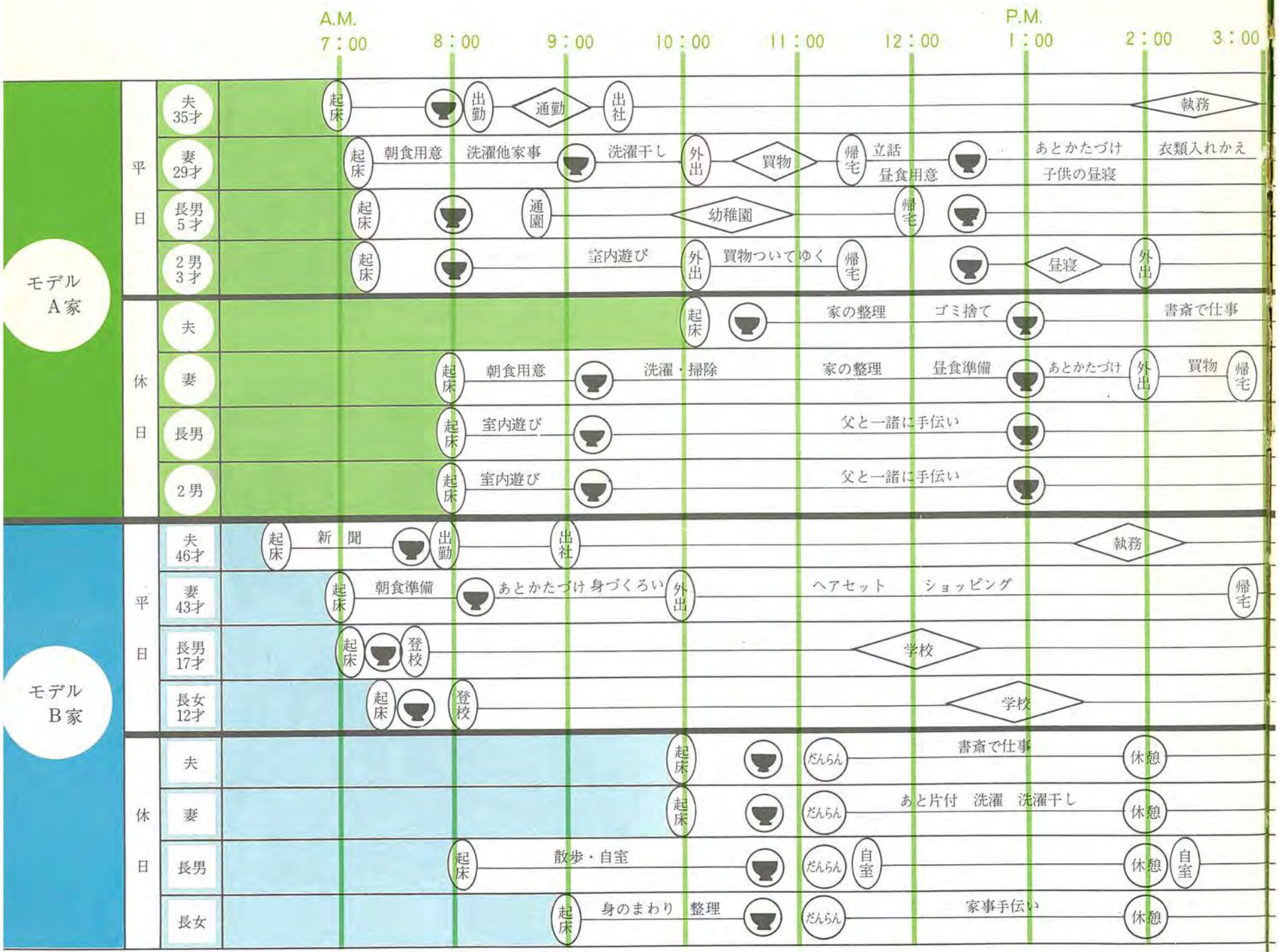


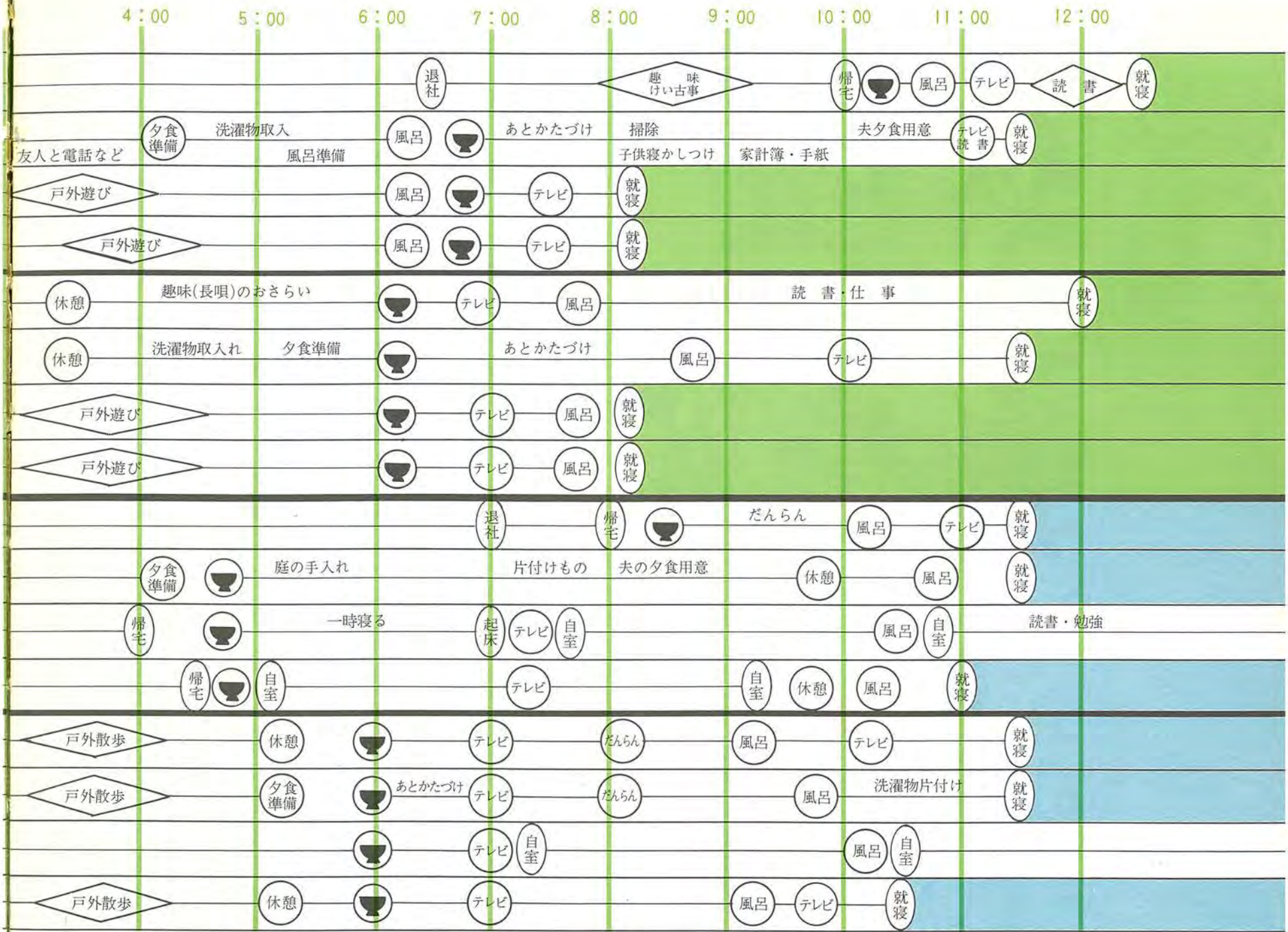


月二回ほど、休日には一家で千里中央センターや、展望台、近くの公園へ散歩に出かけるが、それでも子どもたちは「お父さんはちっとも遊んでくれない」と不満である。

奥さんは、まだ子どもが小さいので、ほとんど家事におわれるニュータウン暮らしだが、手が離れたらサークル活動や趣味を楽しみたいと思っている。今のところA家は子ども中心の生活だが、彼らの成長とともにこの家庭のくらしも変っていくだろう。




A.M.
7：00
8：00
9：00
10：00
11：00
12：00
P.M.
1：00
2：00
3：00
モデル
A家
平日
夫
35才
起床
出勤
通勤
出社
執務
妻
29才
起床
朝食用意
洗濯他家事
洗濯干し
外出
買物
帰宅
立話
昼食用意
あとかたづけ
子供の昼寝
衣類入れかえ
長男
5才
起床
通園
幼稚園
帰宅
2男
3才
起床
室内遊び
外出
買物ついてゆく
帰宅
昼寝
外出
休日
夫
起床
家の整理
ゴミ捨て
書斎で仕事
妻
起床
朝食用意
洗濯・掃除
家の整理
昼食準備
あとかたづけ
外出
買物
帰宅
長男
起床
室内遊び
父と一諸に手伝い
2男
起床
室内遊び
父と一諸に手伝い
モデル
B家
平日
夫
46才
起床
新聞
出勤
出社
執務
妻
43才
起床
朝食準備
あとかたづけ
身づくろい
外出
ヘアセット
ショッピング
帰宅
長男
17才
起床
登校
学校
長女
12才
起床
登校
学校
休日
夫
起床
だんらん
書斎で仕事
休憩
妻
起床
だんらん
あと片付
洗濯
洗濯干し
休憩
長男
起床
散歩・自室
だんらん
自室
休憩
自室
長女
起床
身のまわり
整理
だんらん
家事手伝い
休憩


4：00
5：00
6：00
7：00
8：00
9：00
10：00
11：00
12：00
退社
趣味けい古事
帰宅
風呂
テレビ
読書
就寝
夕食準備
洗濯物取入
風呂準備
あとかたづけ
掃除
子供寝かしつけ
夫夕食用意
家計簿・手紙
テレビ読書
友人と電話など
戸外遊び
休憩
趣味(長唄)のおさらい
読書・仕事
洗濯物取入れ
夕食準備
庭の手入れ
片付けもの
夫の夕食用意
だんらん
休憩
起床
自室
一時寝る
読書・勉強
戸外散歩
洗濯物片付け







2．B家の場合

藤白台の340㎡の分譲地に建った、102㎡の鉄筋二階屋がB家である。御主人のBさんは46才、大阪の大手化学会社の部長で、1年の3分の1は、海外出張といういそがしい身体である。家族は、奥さん（43才）と、高校3年の長男（17才）、中学1年の長女（12才）の4人で、大阪市内から千里ニュータウンに越してきて7年になる。

特に趣味もなく、仕事一途のBさんは、1週間に2回ほどしか、家で夕食をとらず、帰宅が午後11時をすぎることが多い。家に帰ると、立っているより横になっている方が多いと、奥さんは笑う。

●平日

6時30分、早起きのBさんは目をさまして新聞を読む。7時になると奥さんが起きて朝食の準備にかかり、子どもたちも起きて食卓につく。

7時40分、息子が高校へ。徒歩5分のところの阪急北千里駅から約1時間の電車通学である。

7時55分、Bさんが出勤。やはり同じ駅から大阪へ、約50分の電車通勤である。8時5分、最後に娘が家を出る。道ひとつへだてた、つい鼻先の校区の中学校である。

みんなを送り出した8時すぎ、やっと奥さんの朝食となる。9時ごろから、かたずけものをして、さっと掃除をすませる。念入りなそうじは週1回だけである。

この日は10時ごろのバスで千里中央へ買物と、ヘアーセットに出かける。午後3時、帰宅すると雨が降ってきた。娘の学校へかさを持っていくと、知人に出合い、おしゃべりしてしまう。

気がつくと4時、息子が学校から帰ってくる時間なので、あわてて帰宅。すぐ夕食の準備にかかる。受験期の息子をもつB家の夕食は早い。4時30分、娘が帰宅したところで、母子3人の夕食をとる。

食後、5時から7時まで、息子は自室でひと眠りするのが日課となっている。その間、娘も自室にひきあげ、奥さんはこの5時から









7時までの2時間が、1日のうちでいちばん解放された気分になれるという。かたずけものや庭の手入れ、時には睡眠不足をここでおぎなう。

午後7時、息子が起きてテレビのニュースをみる。見終ると、息子はさっさと自室にひきあげるが、娘はひきつづき青春ドラマを見ている。

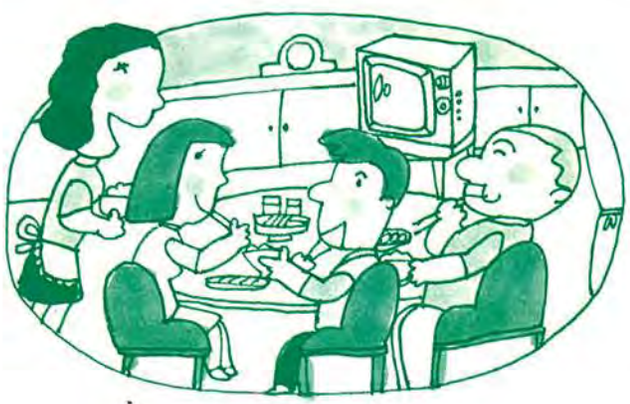
この日はめずらしくBさんが8時に帰宅。奥さんと談笑しながら、ゆっくりと9時ごろまで夕食をとる。

午後10時、B家恒例の夜のお茶の時間である。息子も娘も出てきて一家の顔がそろう。その後、子どもたちは風呂に入り、自室にひきあげる。娘はすぐやすむが、息子はいつまで起きているか、だれにもわからない。

B夫妻も入浴を終えた11時30分、B家の一日は静かに終った。







●休日

休日のB家は子どもたちが早い。B夫妻の寝ている間に起きて、新聞を読んだり、散歩をしたりしている。

10時ごろ、B夫妻が起きて朝食となる。そのあとお茶をのみながらしばらくテレビをみる。しかし奥さんはそこそこに洗たくにとりかかる。洗たくは毎日せず、日曜日にまとめてすることが多い。

11時30分、テレビを切って、それぞれ自室にひきあげ、Bさんも書斎で仕事の残りをする。

午後2時、みんなで昼食がわりのかるい食事をする。3時ごろから娘にせがまれて、B夫妻ら三人は、散歩がてら千里中央センターへ出かける。息子はその間、自室で留守番役をひきうけた。

5時、帰宅して奥さんはすぐ夕食準備、そろって6時に夕食となる。娘のお気に入りのテレビをみながらである。7時30分、ニュースが終ると同時に息子は自室にひきあげる。

午後9時すぎ、Bさん、子どもたち、最後に奥さんが風呂に入り、それぞれ自室にひきあげて、B夫妻はいつものように11時30分、ねむりにつく。



B夫人は、ニュータウン外へ謡曲のおけいこと、ニュータウン内の洋裁の教室へ、それぞれ週1回づつかよっていて、外出の機会が大変多い。そのため、毎日、食料品を買出しにいくことはなく、出たついでにまとめ買いをしている。

Bさんの帰宅時間のおそい夜は、奥さんはせっせと夜のお茶の時間のためのお菓子づくりにはげんでいる。

特に親しい隣人が3軒あり、小さくなった子どもの服を払い下げたり、お菓子をまとめてつくってあげたり、子どものこと、夫のこと、知人の縁談など、何でも話せる気楽な人間関係が育っている。

子どもたちが成長して、かなりたっぷり時間の余裕をもてる奥さんは、今後、もう少しまとまったものを徹底してやりたいという。

今まで、Bさんが海外出張中などに、子どもたちと3人で旅行することが多かったが、長男が留守番役にまわるようになり、母娘の行動が多くなってしまった。これからは、老後のためにも、夫婦の時間を多くもつようにしたいと、B夫人は生活の方向を定めている。





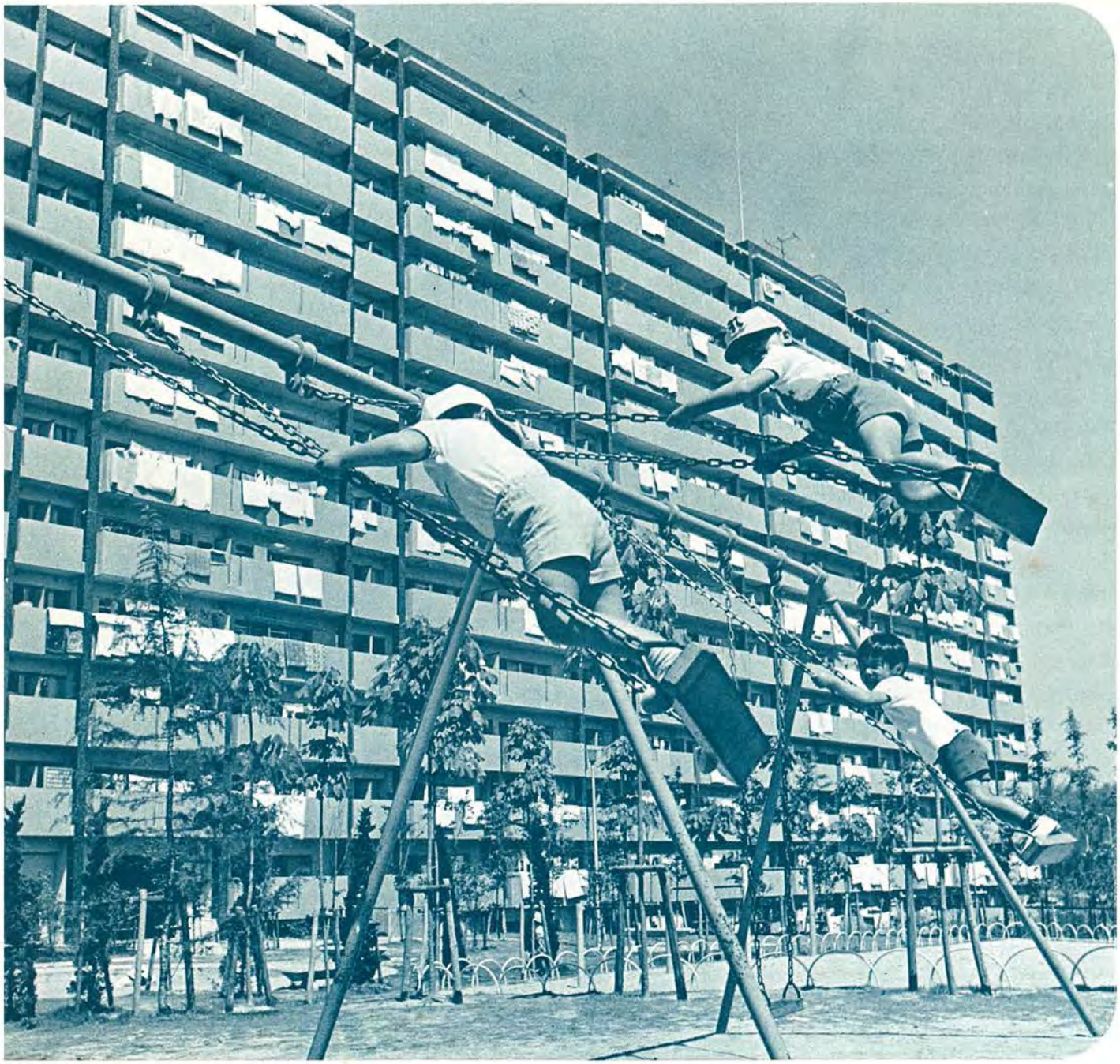
以上、2つの千里ニュータウンの家庭生活を紹介したが、これらを、全国の平均的家庭とくらべてみると、ニュータウンの家庭は、朝がややおそく、夜寝るのもおそい「宵っ張りの朝寝」型という、都市生活型といえよう。ちなみに、全国平均では、午前6時には、2人に1人は起きているし、午後10時には半数がやすんでいる。

また、日常の買物は、全国平均では午後4時前後がピークとなっているが、千里の場合は、午前中に買物をすませる人が圧倒的に多い。

A・B両家とも、思いのほかテレビの影響が少ない。普通、全国平均では、主婦がいちばんのテレビ愛好者で、1日平均4時間50分もみているが、ニュータウンの両家とも、奥さんがテレビにかじりついていることはない。

休日には、A家もB家も、公園や、近くのセンターに散歩に出かけているが、これこそ、環境のよい千里に住むものに与えられた特恵というべきであろう。



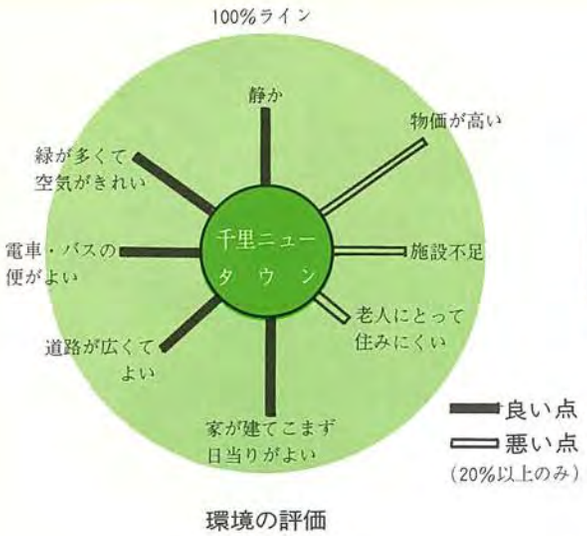




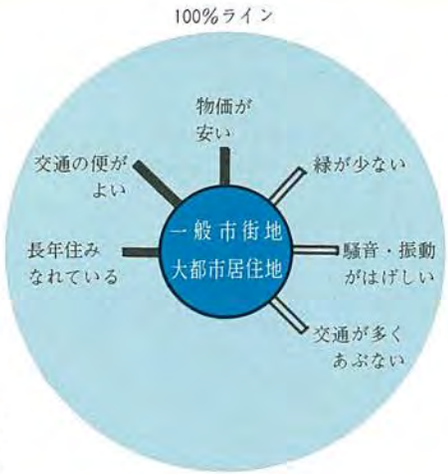


■第4章

千里ニュータウンが教えるもの



環境の評価

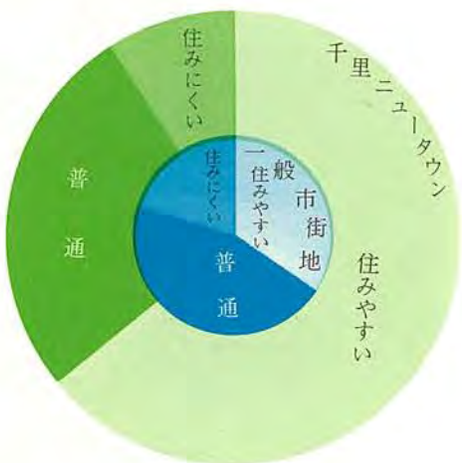


ニュータウン住民の千里評価

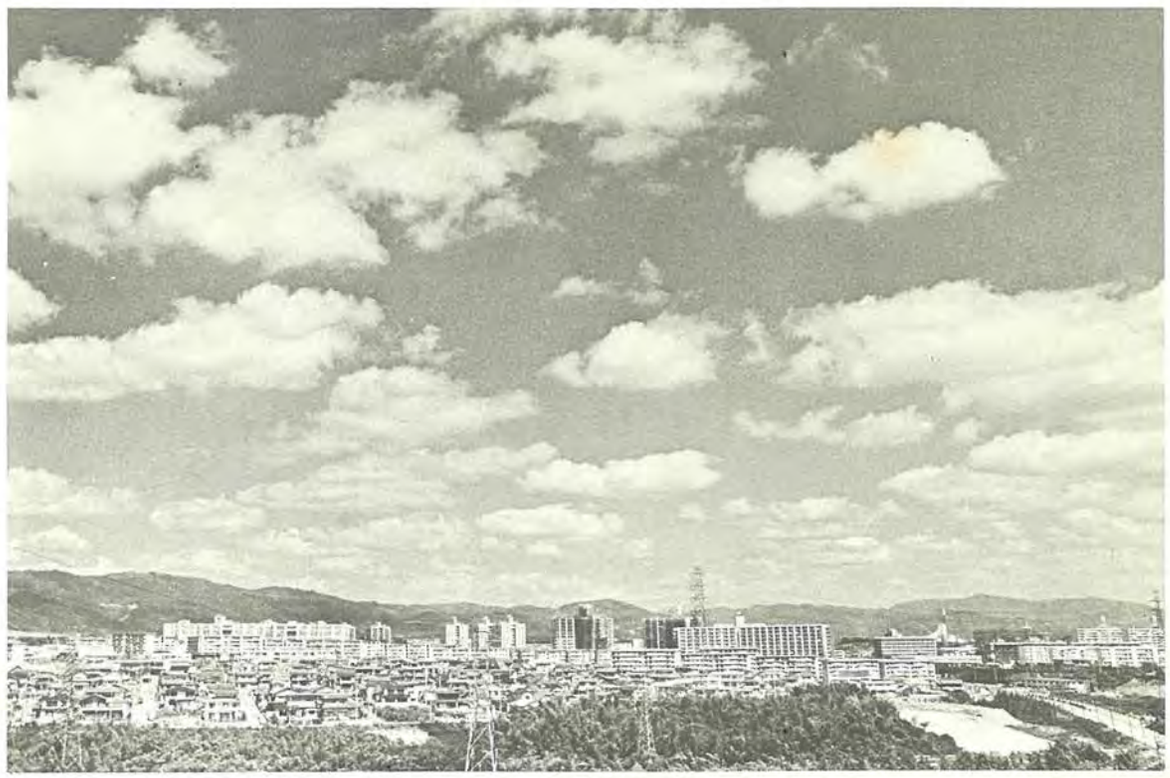
1. 環境評価 (7割が住みやすいと思っている)

千里ニュータウンに住んでいる人びとは、「家が建てこまず日当りがよい」「緑が多く空気がきれい」「道路が広くてよい」「静かだ」ということで、千里の自然環境、生活環境のよさを評価し、70パーセント近い人びとが、千里は住みやすいところだと感じている。

しかし、一方では、不足がちな医療施設などへの不満を感じている。



千里ニュータウンは住みやすいか



2. 要望　（図書館と医療施設）

一般市街地では、公園や、子どもの遊び場がつよく求められているのに対し、千里の住民は、生活施設をふやすことを望んでいるようである。

そのひとつは、比較的生活水準の高い千里に、図書館が１つもないことである。設備のよい、大きな図書館とともに、手近かな規模の図書館も２～３ケ所求められている。

つぎに、診療所、病院、の要望がつよい。医療施設の絶対数が少ないうえに、医師の紹介がないと利用できないオープンシステムの総合病院の使いにくさが、大きな不満となっている。

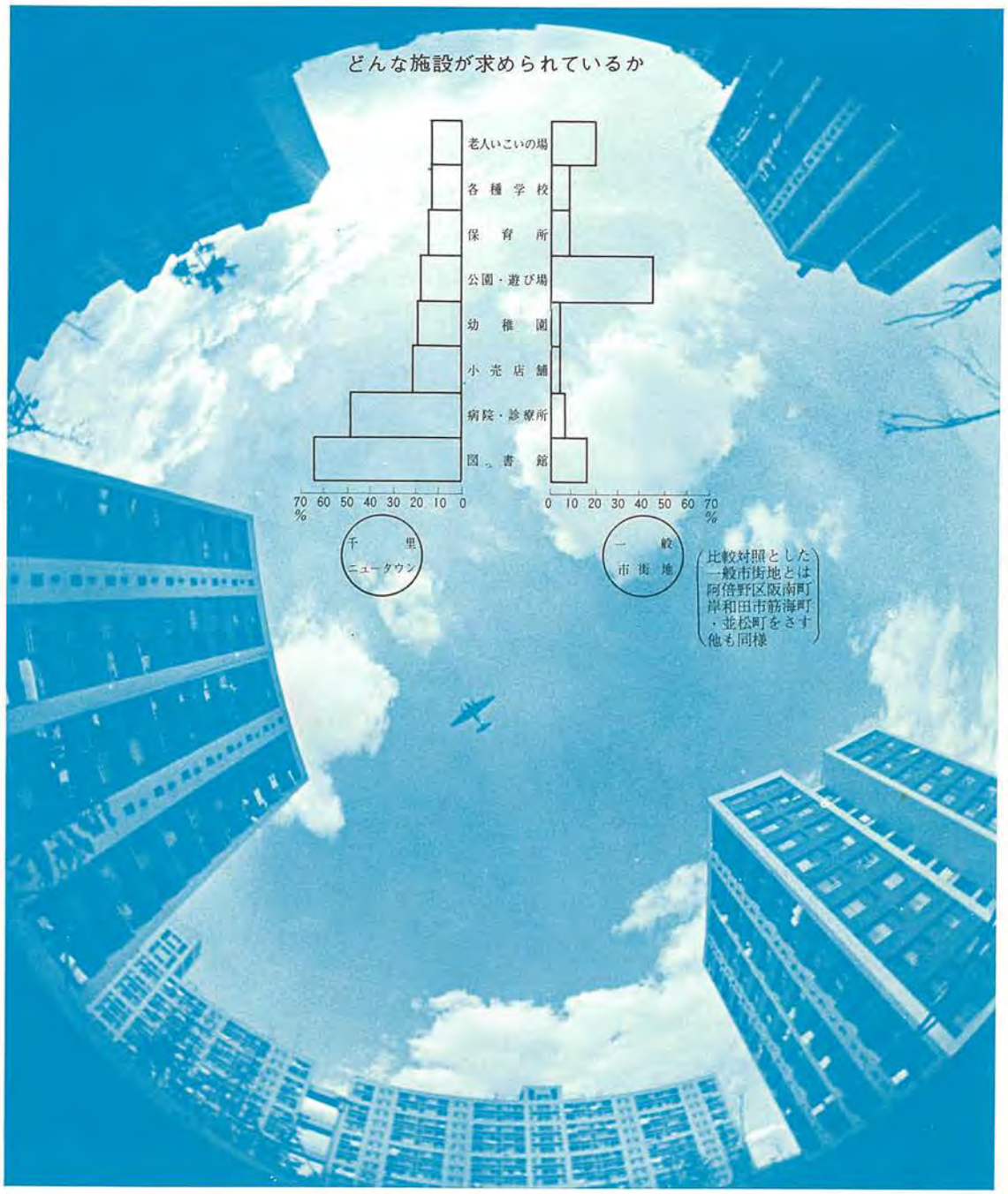
またすべての住区に全診療科目を設けること、公立の総合病院、特別診療科目の設置を望む声もつよい。

第３番目に多い要望は、公立幼稚園である。一般市街地の２倍以上の幼児がいる千里ニュータウンに、幼稚園は13ケ所あるが、そのうち、公立は２つだけである。

現在、幼稚園に通っているもののうちでも「費用を安く」「設備をよく」などの改善を望んでいるものが多い。

そして、恵まれているはずの公園や、スポーツ施設の要望も多い。

千里の遊び場が、おもに幼児向きにつくられており、高学年向きの、かるいスポーツ広場が少ないこと、スポーツ施設では、スケート場、テニスコート、プールが、さらに求められている。



千里の反省

1. 多様性 （バランスのとれたまちへ）

千里ニュータウンは、住宅だけのまちとして計画されたため、さまざまなところで、片寄りが目だつ。

住んでいる人びとの年令や、家族の型が似かよっているし、そのうえ、収入や職業にも、極端なちがいはみられない。

平日の昼間は、女性と子どものまちになるという現象が、そのことを如実にものがたっている。

職場が住まいのすぐ近くにないため、通勤者が、都心のターミナルに毎日集中し、交通マヒなどをひどくする結果にもなっている。

ニュータウンにとっても、職場がないことは、生活施設が充足されにくいし、また、まちの活気が乏しいと感じる人も多い。

豊かで多彩な人間の生活に対応できるようなまちの姿としては、できるだけ片寄りがなく、多様性に富んでいることが重要である。

住宅専用のまちの、静かで落ちついた環境は何ものにも代えがたいが、職場と住まいは、はっきり区別されながらも、ほどよく近接させて、都市としてのバランスのとれた、職住一体のまちづくりをすることがのぞましいと、千里ニュータウンについて総合的な生活調査をした、大阪市立大学住生活研究室の調査報告では述べている。

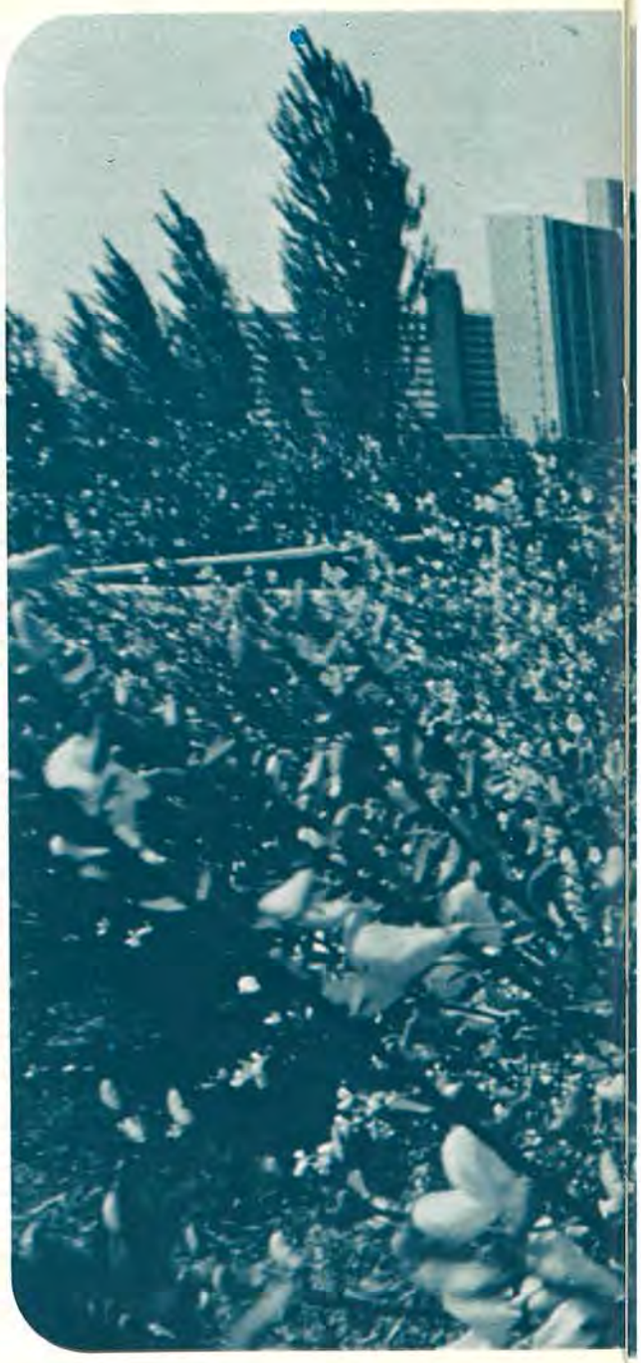
2. 施設の配置計画 （近隣センターを生かす）

千里ニュータウンの施設量が、人口の似かよった他都市とくらべて、大変少ないのは、住宅だけのまちであることと関係が深い。

生活施設は、家庭生活と、職場の生産活動との2つで成りたつ場合が多いからである。通勤にともなって、生活範囲がどんどんひろがっていく。それは、ニュータウンの計画段階では予想されなかった現実である。つまり、住宅だけの都市は、本質的に施設を成立させるエネルギーに乏しいといえる。

購買施設からニュータウンをみると、住宅の配置にアクセントがなく、散漫なため、適当な利用地点を定めにくくしている。〈近隣センター〉→〈地区センター〉→〈中央センター〉という3段階の購買施設も、利用状況からみて充分な効果をあげていないようである。特に、地区センターに近い近隣センターは利用が少ない。買物場所は①近い、②規模が大きい、③サービス、雰囲気がよいところがえらばれ、特に「近い」ことが第一である。このことから、住宅をできるだけまとめて、中心に近隣センターを配し、その周辺には公園や学校など、購買施設以外のものを置かないのが、近隣センターを本来の姿で生かせる配置計画であると報告されている。

それに、買物施設の反対方向に診療所があったり、施設計画が総合性に欠けているところもあり、理想をかかげて計画されたものでも、現実にはいろいろな問題が現れている。住民の要求に適応した運営、管理や配置設計が今後に求められている。





主要参考資料　大阪市立大学家政学部住生活研究室「千里ニュータウン居住者層の消費行動と生活施設利用に関する調査」

監　修　COM計画研究所
写　真　神谷昭六ほか
協　力　大阪府企業局調査課
発　行　財団法人　大阪府千里センター
常務理事兼事務局長　浜屋正則
豊中市新千里東町1丁目2－1
TEL　06－871－3377
印　刷　関西出版印刷株式会社